87
10

心理學書解說

杉山富槌先生解說

モルガン氏比較心理學序論

東京　育成會發兌

(八)冊第三

87-10

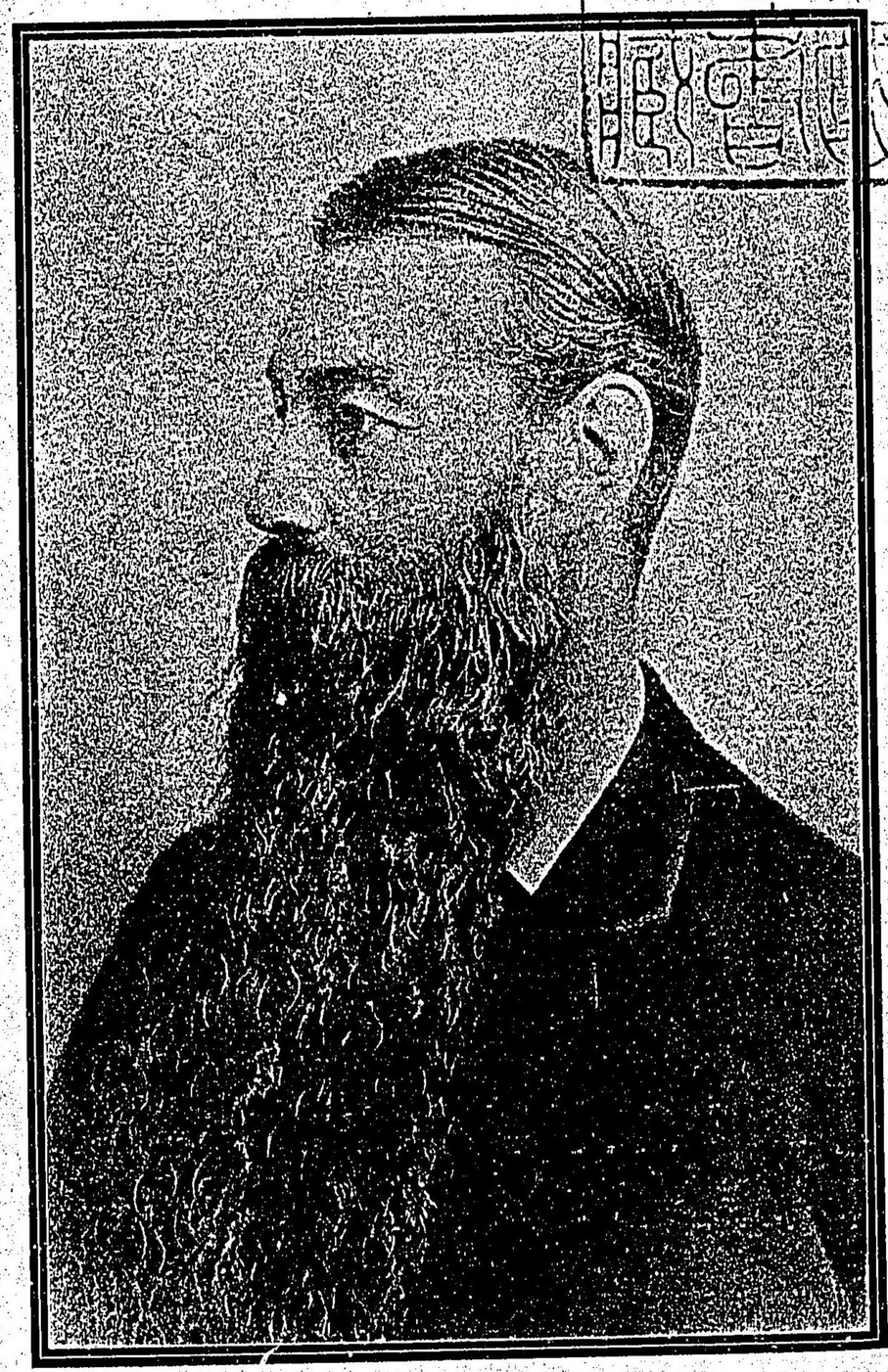
杉山富槌先生解說

モルガン氏比較心理學序論

心理學書解說

東京

育成會發兌



C. Lloyd Morgan.

（松本孝次郎君の所藏に據る）

モルガン氏比較心理學解說

目次

一、緒言……一丁
二、傳記……四丁
三、原書の目次……六丁
四、本書の內容……九丁

序說

一、一元的認識論……十丁
二、自然界の一元的解釋……十一丁
三、分解的一元論……十二丁

本說

第一章　意識の波……十七丁
第二章　意識の生理的狀態……二十八丁
第三章　人間以外のものゝ心……三十四丁
第四章　提起と聯想……四十二丁
第五章　動物に於ける觀念聯合……四十九丁
第六章　記憶……五十四丁
第七章　動物に於ける記憶……六十三丁
第八章　印象の分解……六十六丁
第九章　總合及連關……七十三丁
第十章　動物の感覺經驗……七十六丁
第十一章　自動力と管理力……八十一丁
第十二章　本能と智慧……九十丁

第十三章　關係の知覺……九十六丁
第十四章　動物能く關係を知覺するか……百五丁
第十五章　概念的思想……百十丁
第十六章　動物能く推理するか……百十七丁
第十七章　主觀及客觀……百廿三丁
第十八章　意識の進化……百廿八丁
第十九章　進化に於ける陶汰的總合……百三十三丁
第二十章　人類及高等動物の比較心理學……百三十八丁

五、結論……百四十一丁

以上

心理學書解說

第十二　モルガン氏比較心理學序論

杉山富槌　解說

一　緒言

今回解說者の擔當して解說するのはモルガン氏の『比較心理學序論』であるが、元來解說の主旨は其の著書の內容を闡明して、著者の立脚點を考究するにあるので、モルガン氏の『比較心理學序論』を解說するにも、其の心もちで解說する見込である。併し比較心理學に關する研究は其起原が極て近年にあることとて、言はゞ新科學として漸く世の學者に認められやうとして居るのであるから、之に關する著書も比較的に僅少にして、且つ其研究も充分熟してゐない。從て氏が本書に說ける所も唯だ氏が比較心理學に對して氏一己の意見の大要を多少順序を立てゝ開陳したも

のに過ぎない。卽ち比較心理學の全系統を論議するを主とせずして、寧ろ之に關する氏自身の立脚點を概說したものである。換言すれば、モルガン氏の著はせる本書全體が卽ち比較心理學全系の解說書である。是れ氏が本書に序論の一語を加へた理由であらうと思はれるが、此著書を更に簡潔に解說しやうとするのであるから、多少簡潔に過ぎるの厭ひなきにしもあらずの感があらう。併し之によりて比較心理學の大體の研究的態度――卽ち學者が斯學を研究するに如何なる態度を取れるかに就きて大體の趨勢を推想することが出來れば、當に解說者の滿足する所であるのみならず、又實にモルガン氏が本書を著はされたる主旨にも適ふことゝ思ふ。

前にも言ふ通り比較心理學に關する著書は目下の處では甚だ僅少であつて、本書の如き其中に就きて有價値のものであるに相違ないが、斯學に關して更に有價値のものとしては、ヴント氏の『人間及び動物の心理學』の如きものを推すべきである。――勿論全體の議論及び敍述の工合に於ては、多少の異同は免れないけれど――

うは兎に角、ヴント氏のは他日に期して之を解說することゝして、今回は別に詳しく兩者を比較しないことにした。又これはとても限ある紙數の許さない所である。又もう一つ斷つて置かなければならぬことは、總體の批評を略して部分々々に批評を加へたことであるといふのは外でもないが、本書に就きて批評を加ふべき個處は多くは部分的の事で、其部分々々を解說するに當つて、大體の批評を加ふる方が讀者の爲めには却て解し易いと思つたからである。敢て他意あるのではない。

二　傳記

モルガン氏は當今の學者であつて、我邦にも既に多くの人に知られて居る人であるが、さて其傳記に關しては詳細のことは分らないのである。解説者も種々穿鑿して見たり、或は諸學友に聞き合せて見たが、矢張之を詳にすることは出來なかつた。是は實に解説者も遺憾とする所で、讀者に對してもお氣の毒の次第である。

併しシ・ロイド・モルガン氏は英國の人で、千八百五十二年二月六日に誕生せる人であることだけは確實である。即ち本年は四十八歳の少壯學者であるのだ。されど英國の何處にて生れしや、又其性行は如何までは少しも知られて居らない。現今は英國ブリストルに在るユニヴアシチイ、カレッジの學長をして居る。其以前の經歷は少しも知らない。氏は外に『教師の爲めに著はせる心理學』即ち教育心理學の著述があつて、其書物の序文を米國ニューヨルクの視學官をして居るヘンリーダ・ブリュージェームソン氏が書いて居るが、此人は其著書を『教師の爲めに好參考書なり』と稱

し、又『教育心理學の研究を通俗的になせるものなり』と賛め、且つ術語の説明に注意深きを賞して居る。又スタウト氏が昨年著はせる『心理學綱要』の自序の中にはジェームス、バルドウィン、ラッド等の學者と共にロイド・モルガン氏を擧げて、是れ等諸氏の著述に負ふ所多き旨を記せる所を見れば、モルガン氏が可なり學界に重きを措かれたる人物たるを推想するに足るのである。兎に角氏が當今に於て一方の心理學大家たることは確實である。此外昨年の十月發行の『ゼ、モニスト』といふ雜誌に『心理學と自我と』と題せる氏の論文が掲載されて居るが、其の終には英國教授ロイドモルガンと署名されてある。確かなる經歷は之を詳にすることが出來ないが、氏の少壯心理學者にして、學界に多少頭角を顯はせるものたるに疑ひないのである。

モルガン氏の著書に本書の外にギン會社の出版に係はる『動物の生活及ひ智慧』と題せる百十頁許のものがある。是は比較心理學の部分的研究の發表であるゥれはさて措き、今解説する『比較心理學序論』はゥォルタースコット書店の『現代科學叢書』中の一冊で千八百九十四年の暮に出版された書物で、現に我邦では制合に廣く行

はれて居るゝれも畢竟此種の著書が極めて尠ないからである併し今ではヴント氏の著書も英譯されて居るから英語を以て兩書の比較研究も充分に出來て讀者も利益する所が定めて多からうと思ふ。

今解說の便宜の爲めに本書の內容を一目瞭然ならしめんとて左に本書の目次を掲げて置う是れ解說の順序上當然のことゝ思ふからである。

三本書の目次

序說

本論

第一章　意識の波

第二章　意識の生理的狀態

第三章　人間以外のものゝ心

第四章　提起と聯想

第五章　動物に於ける觀念聯合

第六章　記憶

第七章　動物に於ける記憶

第八章　印象の分解

第九章　總合及び連關

第十章　動物の感覺經驗

第十一章　自動力と管理力

第十二章　天性と智慧

第十三章　關係の知覺

第十四章　動物能く關係を知覺するか

第十五章　概念的思想

第十六章　動物能く推理するか

第十七章　主觀及び客觀

第十八章　意識の進化
第十九章　進化に於ける陶汰的總合
第二十章　人類及び高等動物の比較心理學

以下各章の順序を逐ふて解説を試みやうと思ふ。併し一言斷つて置くのは、原著は三百七十餘頁もあるのであるが、之を限りある紙數の冊子に解説するのであるから、簡單を主として餘り多岐に渉らないやうにする。讀者幸に之によりて原著の主旨を了解するを得ば實に望外の滿足である。

四本書の内容

序説

本書の著者モルガン氏は此序説に於て、其哲學的見解認識論上の立脚點を述べて居る。蓋し如何なる學問にても、深く探究するときは結局認識論に入り、遂ゐに哲學上の問題に入るものである。英國に於て認識論を始めて唱へた人はロックである、而かも彼が認識論を研究するに至りたるは元は法律上、宗教上の問題より遂に認識論に論究するに至つたのである。又彼のハクスレーは元と生物學者である、然れども其研究の結果は生物學に其研究を止めて置くことが出來ず、認識論に入り、遂に哲學上の問題を解釋せんと試むる樣になつた、モルガン氏も科學研究の結果、遂に單に科學の研究に止まることが出來ないので、認識論、哲學の諸問題に立ち入つたものと見ゐる。而かも本書は比較心理學序論といふのであれば、廣く認識論、哲學等を論究することが出來ない。されば更に序説として本書の最初に其一端を論述し

たことゝ思ふ。吾人は之によりて氏が哲學上の見解幷びに認識論の一端を揣摩することが出來ると信ずれば、次に其概要を記載する積である。吾人は之に對しては大膽なる批評を下すを止めて、學者の判斷に一任する積りである。

一、一元的認識論。

吾人の見解に反對するものは二元的認識論である。而して二元論の立脚點は認識の主體と認識の客體とが獨立の存在をなすことである。然れども是れ抑も誤れる考といはざるを得ない。何となれば、吾人の經驗は實に認識を成立せしむるものであるが、其經驗をなすときには唯々見、唯々聞き、唯々觸るゝのみである。其主體となし客體となすのは更に其經驗を反省した時に名くるに過ぎないのである。故に吾人は唯々經驗を有するのみであつて、主觀、客觀の獨立せる存在あるものではない。

主觀界卽ち認識の主體、客觀界卽ち認識の客體が各々獨立せる存在を有するものと假定するのは二元的認識論である。眞に存在するは一の經驗あるのみとす

るは一元的認識論の立脚地であつて、吾人は寧ろ後者を採るものである。

若し經驗の主體卽ち反省せざる時の主體は何かといはゞ、吾人は之に答ふるに不可知の言を以てするより外はない。

二、自然界の一元的解釋

人は有機體として單一にして不可分的のものである。其身體といひ精神といふのは一有機體の異方面である。肉體と離れたる精神なく、精神を離れたる肉體あることなし、畢竟するに有機なる一物の兩極である。

抑も吾人の所謂自然界は吾人の知り得べき存在と同範圍である。自然界は如何に千態万狀なるも、吾人は之を科學的研究法といふ一方法にて解釋することが出來る。而して此自然界を解釋する一方法とは、自然界は進化の理法に從ふといふことである。勿論進化といふ理法の內卽ち進化なる作用の內には種々の特質あるには相違ない。卽ち第一陶汰、第二總合、第三混沌より整然たるものに進化す等である。然れども是等は元より進化なるものゝ特質に過ぎないのである。

三、分解的一元論

是れ知識の對象卽ち已知若しくは將知の自然界の分解に於ける問題である。吾人が知る所の事物は凡て知識の對象である、是れ啻に五官の對象のみでなく、思想をも含むのである。卽ち主體に就きて知る所のもの卽ち吾人の內界を反省すれば、前の思想も亦知識の對象となる。此に於て主觀界が客觀界となるのである、卽ち今の主觀は一瞬前に主觀界なりしものを客體として觀察するのである。今人を取りて之を分解するに、精神及び肉體となる、是れ前の主觀界、客觀界と同じく、分析によりて始めて生ずるものである。人は常に單一にして不可分的のものである。是れ元より假定に過ぎない、(證明すること出來ざるが故に)精神と肉體といふも假定である。吾人は唯々同じく假定の內でも、合理的と信ずるものを採用するのみである。其果して何れが眞理なるか否かは將來の學者を待たなければならぬのである。

されば吾人は今合理的と信ずる所の假定に從ひ、有機體は單一にして不可分的のものとなすのである。分析的思想の上にのみ肉體と精神とあるのであつて、畢竟するに一有機體の異なる二方面となすのである。卽ち肉體と精神は宛かも主體客體の關係と等しく、區別し得べきも分離することの出來ないものとなすのである。

吾人の腦髓に就きて之を分析すれば、神經作用と意識作用とになる。是れ亦一腦髓の二方面に過ぎないのである。主體と客體、精神と肉體、神經作用と意識作用、是等何れを主、何れを從とすべきものではない。併し其根本的實在は實に人といふ一元にして、皆な其分析上方面の異なるに過ぎないのである。

茲に起る問題は、一有機體を分析すれば複雜なる勢力卽ち客體、肉體、神經作用と複雜なる意識的現象卽ち主體、精神、意識作用の二方面を生ずるは可なり、其根本的一元たる有機體は如何なるものより進化せるかといふことである。吾人は之に答へて其客體的方面は進化の根本に遡れば益す單なる有機體となり、其極無機體となるのである。他の方面は之を遡るに益々單純なる意識作用となる。卽ち

進化の根原に溯れば、其極は一方は勢力の最も單純なる樣式の神經作用となり他は最も單純なる意識作用となるのである。此論たる勿論思辨的である。然かも吾人は吾人の論の論理の法則に反するあるを認めないのである。

吾人の説に對して他に又二つの反對説がある。卽ち(一)唯物論(二)唯心論の二説である。此二者元より一元論なることは吾人と一致して居るが、而かも共に經驗の二つの方面の一つを取つて之を實在とし、他を之に從屬せしめたものであつて吾人の説とは大に其趣を異にするものである。

或は曰はん、汝の説は一元論を公言するも、到底調和すべからざる二つの方面を假定す、是れ唯言語上の異なるのみ、二元論の假面を被りたるものゝみと。此批評は吾人の一元論を餘り重く看過ごしたるものである。吾人の所謂一元論とは全體として卽ち根本に於て一元を主張するものであつて、凡て何處までも一元なりといふのではない。卽ち吾人の説は要するに自然界は單一にして不可分的である。自然界は科學的研究法の一方法によりて解釋し得べく、又實在は單一不可分的であつて、主觀、客觀の二界となすは分析上の二方面、換言すれば實在の二方面となすのである。

以上は氏の懷抱せる説であるが、蓋し氏は其の論法より見るも、又本書の内容より見るも、全く經驗論者である。經驗論は吾人の知識經驗より來るといふ假定を有するものである。扨て此經驗には二個の方面がある。卽ち經驗の主體と客體とである。而して其の客體なるもの、内には我と非我卽ち通俗に云ふ主觀界と客觀界とがある。然るに此我と非我との間には根本的區別がないものである。此事を看破して非我の方面よりのみ自然界を解釋せんとするものは唯物論であつて、我の方面卽ち主觀的(經驗の主觀にあらず、經驗客體中の主觀)より宇宙を解釋せんと勉むるものは唯心論である。此唯物論唯心論共に一部の眞理を看破して、我非我元と平等なり、根本的差別あるものにあらずとなせるだけは可なるも、未だ經驗の客體中より脱出する能はざるものである。其上に更に經驗の主體の云ふべからず、知るべからざるものあるを知らないのである。而して元と經驗の主體といひ客體といふのも

根本的に差別あるものでなく、畢竟するに一經驗たるものである、其經驗の主體といひ、客體といふもの畢竟するに分析の結果である。然らば經驗の主體は何故にいふべからず、知るべからざるかといへば、之を經驗の主體といへば、既に客體に變じたものである。例へば犬を想像して居るときは其想像の主體たるものがなければならぬ、併し一たび今犬を想像し居たりしなりと回想するに於ては、既に客體に變じたのである。

- 經驗
  - 經驗の主體
    - 不可言的
    - 不可知的
    - 我或は主觀界
  - 經驗の客體
    - 非我或は客觀界

唯心論　唯物論

即ち吾人は以上の說明を附記して以て氏の說を闡明することが出來たと信ずる。

究竟此問題は餘程講明を要する所のものであつて、輕々に論じ去るべきものでないから、吾人は別に批評を加へず、單に氏の說として紹介して置くに止める。

本論

第一章　意識の波

心理學といふ名稱より之を見るも、物理學に對するものであつて、直ちに心に關する學問、心の事を研究する學問とふいことは明かである、然り實に心理學は心の事を研究する學問に相違ないのである、然るに此心なるものは一言にていへば甚だ明了なる言葉の樣に思はれるけれど、其言葉の意義を分解して考へて見ると、甚だ曖昧なものであつて、古來種々の說がある。今日に至つても學者間に未だ一定した考がないといふて宜しい。「心」とは何をいふか、吾人は容易に之に答ふることが出來ないのである。蓋し通俗に『心』といふものは學問の上では之を意識といふが、此意識は實に吾人の五官を以て經驗することの出來ない、唯々反省することによりて

のみ其存在を知るべきものであるが故に之に對する解釋の困難なるは亦無理ならぬことである。

實に心理學は心に關する學問である。卽ち意識を研究する學問、更に委しく云へば意識的現象を研究する學問である。然るに意識の解釋は甚だ困難であつて學者間に種々の意見があるから、此意識的現象を研究する學問も從つて學者によつて種々不同あるのは實に數の免れざる所である。從つて亦斯學の研究方法にも種々あつて、一致せぬのも尤もなことである。古代は之を一個の獨立せる科學とせずして、哲學の一部として全く思辨的に研究したのであるが、今日は一般に科學として研究する樣になつた。是れ亦畢竟意識に對する見解の相違より生ずることゝいふて宜しい。今日此學を科學として承認し、科學的研究法を用ふるに至つたのは實にロック の功である。

扨て又科學として研究する上にも一致して居ない、勿論今日では昔の樣に全く獨斷的に演繹して議論をする人はないが、或は理性を根據として之に多少の實驗觀

察を加へて論ずる學者もあれば、或は全く經驗により歸納的に論究する學者もあつて一致しないのである。是れ亦實に意識に對する解釋の如何によりて斯くの如き差異を生ずるのである。されば如何なる心理學者も先づ意識に對する其見解を明にして置く必要がある、是れ本書の著者モルガン氏が第一章に於て先づ意識の事を論じた譯に外ならない。

扨て古來意識の見解に大體三通りある。第一說は意識といふよりも寧ろ靈魂と名づくるのが適當であつて、肉體と離れて個別的に存在するものとなし、凡ての動作は其命令によるものといふ樣に考へたのである。靈魂不滅、輪廻說等を論じた人は無論此考で、此說は今日の學者間には殆んと之を信ずる人はないやうである。第二說は第一說と全く反對の極端に走り意識的活動は神經作用であつて、神經作用の外に意識作用を認めない說である。第三說は兩者の折衷說で、肉體卽ち神經を離れて意識的活動あることなし、意識は神經によりて其活動をなすには相違なきも、神經作用卽ち意識作用でないといふ說である。

以上大體に三種の說があるとして著者は何れの說を採るかといふと、第二の說を執つて居るのである。神經作用即ち意識作用なり、凡ての精神的現象は神經に於ける一種の震動であるといふことは後の章に於て反覆說いて居るのである、又後章に屢々『メカニズム』即ち器械的活動といふ文字を意識作用に就きて用ひて居るが、蓋し全く第二の說を取つて居るのである。

著者は第一章に意識のことを論じて居るが、意識の活動の有樣を波形を以て說明して居る。此事はジエームス氏の既に論じたことで別段著者の創見ではないが、されは本書の緒言にも著者が自白して居ることである。併し意識作用の見解に至りてはジエームス氏とは異なつて居る。ジエームス氏は寧ろ彼の折衷說を採り、著者は神經作用即ち意識作用として居る。即ち著者の說はスペンサーなどの考に似て居ると申して宜いと思ふ。

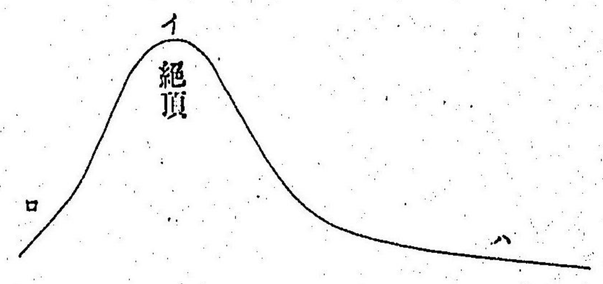
扨て著者モルガン氏の意識に對する見解は如何、其所謂意識の波とは如何なる說明であるかを述べんに、氏は意識に對しては定義は擧げて居ないが、こして始めに意識作用は現在的のものだといふことを論じて居る、其大体の主意は次の如くである。

一寸考へると吾人は或は過去のことを追想して見たり、或は未來のことを豫想して見たりして、現在の事を意識して居ることは少ない樣に思ふ、然れども更に一歩を進めて考ふれば、吾人の意識する所は現在の狀態に限られて居る、何故かといふと過去の事、未來の事、凡て之を意識するのは現在である、事柄は過去或は未來の事ならんが、併し之を意識する作用即ち活動は現在に起るのである、現在の一瞬時に起るのである、過去及び未來の事、其儘過去及び未來に於て意識することは出來ない、過去又は未來の事實を再現して、其表象を現在に描き出して、其表象に就いて意識的活動が起るのである、即ち意識の活動は凡て皆な現在にのみ限られて居る、更に之を換言すれば、凡て過去及び未來の事の再現は意識の現在の瞬間に於てのみ起るのである。」

斯く論じて居るが偖てこの現在といふは實に一瞬時であつて、直ぐ過去になつて

仕まうから、意識も瞬間毎に變轉して止ることない。著者は茲に適切な例を數多擧げて説明して居るが、其一例を擧ぐれば、恰かも書を讀む樣なものだと云つて居る。書を讀むときに、或るページの或る文字に眼が注いで居る、次の瞬時には其次の字を見、其次には其次と、次第に一字一字見てゆき現在見て居る文字は明丁に見、既に見終りたる文字は次第に眼から消えて行つて又次第に新らしき字は口頭に上りて、正に意識に表はれ、かくて其ページを讀み終るが、意識の活動も之とよく似て居る。意識作用に於ても現在の瞬時に意識して居ることは甚だ明丁であるが、次第に過去のものとなつて、遷り行くに從つて次第に不明瞭となる、これを心理的波形にて表はせば次の如くである、

即ち圖中(イ)なる絶頂は現在の瞬時の意識狀態を表はし(ロ)は次の瞬時に起らんとするもの(ハ)は既に起り終りて過去になる樣を表はしたのである。而して著者は凡て此圖中に示してる部分を意識狀態と名け、其頂點卽ち現在に於ける最も明瞭なる部分を焼點的部分と名け、其兩側卽ち曚朧と意識する部分を傍邊的部分といふて居る



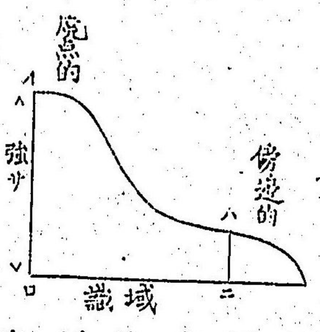
此波は意識を時間的に説明したるものである。現在、將起、既起と區別したのは時間的である。氏は又此波を用ひて空間的に説明した、氏の用ひた例を採つていはゞ、遠方にある高塔の尖端に眼を注いで居るとせんか、此時に最も明丁に見留るのは尖塔である、併し此時に見るのは尖塔計りではない、之と同時に亦他の部分をも見るのである、併し尖塔に眼が注いで居る時には他の部分は其尖塔を隔つるに從つて次第に曚然となり、而して見える部分と見えない部分とは宛かも晝夜の區別の樣に茫然として明かに區劃線を付くることが出來ない樣になりて居る。兎に角其見える部分は精神上には亦意識狀態に相當し、尖塔は所謂焼點的部分となり、他の曚然たる部分は亦之を傍邊的部分といふて居る、是れ空間的に説明したの

である。氏は明かに意識の波の内には此時間的と空間的と二つの意味を含んで居ることをいはざれども其説明によると此二義を含んで居るのである。

氏は又『サブコンシアス』といふ言葉を用ひて居る、是は明丁に意識しては居らぬが併し全く意識せぬでもない卽ち意識と無意識との中間に位するものをいふのである前の例で云へば尖塔以外にありて而かも朦然と見える部分をいふのである、予は之を從屬意識と譯せん或は補充意識といふても宜いのである此從屬意識と云ふ言葉は近來大に心理學者間に用ひらるゝ言葉で古は唯々意識と無意識とに別つたのに近來其間に此從屬意識なる語を用ふることになつた。

扨てモルガン氏は茲に注意を加へて居る、ろれは此從屬意識は朦然たるものなれば余り重要なものでない樣に思はれるけれど決してろうでない甚た大切なもので意識―燒點的意識は實に此從屬意識の影響を蒙るものだと特筆して居る。又前瞬時の意識は後瞬時の意識の原因となること甚だ多く是れ亦大切なものだといふことも反覆引例して論じて居る。

又氏は意識の波の復雜と强さとの度の事に就て論じて居る卽ち意識が或る一つの事に集注するときは意識狀態が單純なる代りに强さが大に思想散亂するときは意識狀態が復雜なる代りに强さが小なることをいふて居る。これを亦圖形を以て説明すれば次の如くである。



扨てかく圖形を用ひ曲線にて意識狀態を示すことは元より困難である第一燒點的强さといふのは何程だか數學的に示すことは出來ない又傍邊的要素の比較的强さ圖で之を云へは(イ)(ロ)の高さと(ハ)(ニ)の高さとの比較的强さを測定することが出來ない故にかく曲線を用ひて示すのは單に説明上の便宜に過ぎないのである著者自身に此事をいふて居る意識狀態は非常に錯綜せる綜合の結果なれば圖に示す如く單純なるものならざれども亦圖にて示すことも不正のことではなからうと思ふ氏は又其序言に主張した一元論を此處にも次の樣な意味で論じて居る。

意識の瞬時に於ける心理的波形は單一で不可分的である其燒點的といひ傍邊的といふも共に單一なる意識作用である現に意識して居る時には是は明了だ彼は不明了だと區別しては居らぬかゝる區別をなすは反省の結果である云々著者は既に意識は瞬時毎に變遷して暫くも止むときなく前に起る波形は後に起る意識に影響し、又外界よりの刺激によりて進み行くてと恰かも波の一上一下暫くも止むときなきが如くであると論じて居る。されば茲に是非一つの問題が起つて來ねはならぬ。それは意識が左樣に變轉して止むときなく、然かも一たび起りたる波は次第に其勢力を失ひ、竟に其形をも止めざるに至るとすれば、昨日意識したことは今日は消滅失せねばならぬ、昨年經驗したことは今年はなくなられねばならぬ、然らば如何にして我といふ昨年も今年も連續する觀念があるか、學問上でいへば、如何にして人格の統一といふことが出來るかといふことである。此問に對する氏の説明は次の如くである。

(一)こゝに身體組織の有機的狀態より生ずる所の從屬意識的要素の簇集ありて、此は身體の健全、不健全、快活、疲勞等によりて變ずるものなれども、猶は多く一致の點を有するものにて能く人格の統一をなさしむるものである。又燒點的意識は常に變遷して止まざるも、其の傍邊的身體に對する有機的貢獻は連續の部分的基礎を形成するに足るべき持續性を與ふるものである。

(二)又他に知的及び道德的存在より生ずる所の從屬意識的要素の簇集ありて、能く人格の統一を維持するものである、卽ち吾人の生涯の目的、或は懷抱せる所の理想、或は確固たる信仰等は是等の中に數ふべきである

卽ち氏の考では人格の統一をなさしむるものは重に從屬意識的要素であるとしたのである。詳言すれば吾人は瞬時毎に燒點的意識を有するとともに、又傍邊的意識卽ち從屬意識といふ朦然たる意識を有するものである、此朦然として意識するともなく、意識せぬともなきもの——之れは常に直に意識に現はれ來るも——が、重に人格を統一せしむるものであるとしたのである

以上略述したる所によりて、所謂意識の波に就きての意義を明にすることが出來

たが著者も言へるが如くこれは實際意識の波に就きての考究の第一歩たるに過ぎない吾人は更に歩を進めて之を考究せざるを得ないのである。

第二章　意識の生理的狀態

此章に於て論じて居ることは刺戟の神經に及ぼす作用及び神經活動の有樣のことである。氏は始めに生死とは如何なるものかといふことを生理的に論じて居る。是は別に面白き獨創の見解といふ程の事はない、一般生理學者の說く所と大同少異である。卽ち吾人の肉体は原形質を含む所の細胞より成りて、生活間には此の細胞中に一種特殊の複雜なる化學的作用起り、之によりて精妙複雜なる勢力の變化始終起て居るが、兎に角に物質界に屬する勢力なる以上は物理上の原則にて支配せらるべきものである。而して生活せる有機體が其固有の活動をなす特殊の狀態を生活的狀態と名くるのであるといふに過ぎないから、如何にして生活なる現象が生ずるかを說明せるものでおいたゝ細胞間に存する一種精妙の勢力の變化といふのみでは甚だ漠然たるものである。されば氏の說明は十分なるものではない、併し又生死などの問題は心理學以外の問題であるから、深く說明すべき責もないのである。又死といふことに就ても一言にていへば其勢力の一種精妙の活動が止んだ狀態を指すといふに過ぎない。

氏は次に肉體と精神との區別を論じて居るが、是れ亦別段珍らしき意見がありもない、唯々精神とは何かと問を發して、是れ意識の波が精神を組成して居るといふて居るが、是では說明にはならない。意識といふも精神といふも、唯々全體と部分との差である。寧ろ『トートロヂー』(異語同義)である。氏も是にては精神の定義は不完全なれども經驗的實驗心理學では是で澤山だといふて居る。次に氏は觀念の把住の事を論じて居る、其大意は次の如くである。

吾人は屢々觀念を保存すといふ。然れども是れ通俗の語であッて、嚴正にいふときには、正しくないことである。何となれば、意識の波として存在する間は、保存せりといふは宜しきも、既に其波が引き去りて跡なくなりたるものを、如何にして

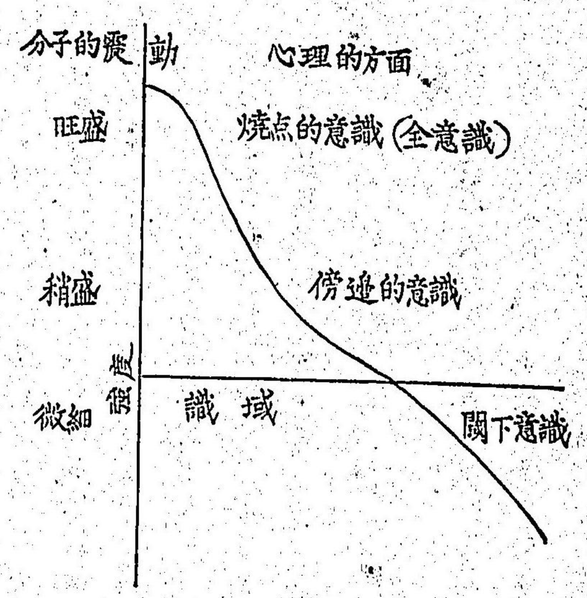
保存するといふべきや既に過ぎ去つた意識現象は其印象なると觀念なるとの別なく、皆な等しく成立を失つたものである。或は次の如く難するものもあらん、即ち論の如くならば意識の波は現在の位置に於て更に過去のものとの關係を失つて非常に混亂するのみでなく、又觀念の保存なしとすれば、心理的分解といふことも出來ざる筈なりと。之に對して吾人は次の如く答ふべし、即ち吾人は觀念を保存するとはいはず、之を『心意に喚起す』といふのである。例へば去年開いた薔薇の花の如く、又五分時以前に發した音聲の如きものである。過ぎ去つた后は更に其跡のなきものである。但し薔薇の木さへ活きて居れば今年も花開き、吾人が發音機を有する以上は何時でも音聲を發することの出來ると等しく、吾人が生活し、健全であつて精神に大異動のない限りは以前に生じた觀念と同樣の觀念が再び出來ないといふことはない。

此論は經驗説の極端といふて宜しい。氏は觀念の把住といふことを絶對的に否拒したのである。勿論觀念の把住といふても、起つた所のものが少しも變らず其儘で保存するといふ説は現今は勢力なき説であるが、氏の如く全く把住を拒みては極端に走り過ぎはせぬかと思ふ。氏の引ける譬喩の樣に、意識現象は一度開いた花の樣に、又過去の音聲の樣に、全く消失して、今度開く花は去年開いた花とは更に關係ないといふならば、過去に經驗せることを夢みるなど、又幻想などの樣に實際何等の刺戟もないのを實在と思ふなど、又睡眠術にかゝつた人が過去に經驗せる事實より種々の觀念を作り出す如きことは、如何に説明せんとするのであるか、若しかく再生するは未だ全く消失するに至らず、從屬意識となりて居るのであるといふなら、餘り牽强に過ぐるとしか思はれない。よし夫を許すとしても從屬意識といふは何時まで又何處まで存在するか、甚だ漠然たるもので、餘りに獨斷的ではないかと思ふ。されば氏が『吾人が生き健全なる以上は以前に生じたと同樣な觀念が又た生ぜざる理はない』といふのは餘りに言ひ過ぎた論だと思はれる。又注意を加へて喚び起すといふなら、是非共喚び起されるものがなくてならぬ筈である。又概念を作るといふのは多くの經驗した事實より共通の點を抽出して作るのであるが、若

し把住といふことがなかつた日には、其共通の點を持て居るものを知覺する時には間があつてはならぬ筈である。兎に角に氏の說は吾人は採用することが出來ない。少くも氏が用ひた例は宜しくないと思ふ。

次に意識の波は何から起るかといふことである。其始めは刺戟である。即ち外感覺機關より來る所の刺戟である。之は各機關にある神經に作用を與へ、之が腦に傳はるといふのは今日では一般心理學者の信ずる所であつて、氏も其說を取つて居る。併し茲に注意すべきは、刺戟が神經を傳はつて大腦に達するといふても、刺戟が受けられた其儘で傳はるのではない。刺戟を神經が感ずるときには、何か一種の震動樣の又は攪亂樣の作用を神經に與へて、之が大腦に傳はるといふ考である。

然らば意識の波の强さは如何にして生ずるかといふ問題が起つて來る。之れも氏の說として別段斬新な說ではない。刺戟の多少によるのであるとする說で、ヘルバルト以來多くの學者の唱ふる所であつて、特にヘルムホルツ、ヴント等の學者が熱心



に研究した所である。茲では唯々其學者の研究した結果として氏が記して居る法則を擧れば十分であらうと思ふ。即ち

意識作用の强度（感覺のこと）は刺戟の大小によりて强弱あり。若し又多くの刺戟あるときは刺戟間の比較的强度の如何による。

氏は又閾下意識（インフラコンシエンスネス）といふ語を用ふることが度々あるが、是れ如何なるものかといふに、刺戟の强度が甚だ微弱であつて、未だ大腦に何等の影響をも與ふるに至らざる場合には、其刺戟は識域

以上に上らずに止む其作用をいふのである。此閾下意識といふのは彼の傍邊的卽ち從屬意識と迄もなるに至らざるものである。併しこれは消極的のものではなく、實際存在して積極的のものであると氏はいふて居る。故に氏は意識作用を區別して三つの狀態として居るのである。卽ち第一に燒點的意識、第二に傍邊的或は從屬意識第三に閾下意識である。此閾下意識といふのは多くの心理書に無意識といふてゐるものである。唯名稱の上で無意識といへば全く消極的の意味であるが、閾下意識といへば積極的の意味であるのである。これを氏は曲線を用ひて說明して居る。

第三章　人間以外のものゝ心

學者が若し自家一人の意識現象のみに就きて反省して研究したるものならば、其研究より得た結果は何程正確なものでありても、其範圍は自分一人の心理的現象を說明するに止るのである。然るに他の學者の反省して研究した結果と比較し、對照して得た結果ならば、其結論の基礎は甚だ鞏固のものを得るのである。更に眼光を廣めて心理的狀態に伴ふ所の神經作用の生理的方面をも研究したらんヨには。此等の多くの研究より得たる結果は益々確實のものとなるのである、是れ實に心理學に比較研究法の大切なる所以である。

然るに比較心理學の困難である點は、吾人が直接に知ることの出來るのはたゞ自家一人の意識現象に限ることである、故に他の意識現象を知るのは比論法を用ひて推察するより外なきものである。而して動物の心理的狀態を解釋するのは、人類の心理狀態を以て推測するのであるが故に、其解釋は果して正しきものであるか否かは眞實には知ることの出來ない、併し全く想像憶說ではない。何となれば、吾人の依る所の比論法は根據を有するものであるからである。卽ち吾人は動物の有機的狀態に就きて確實なる知識を有するからである。

解剖學、生理學などの研究の結果、大腦中にある知覺中心に就きて、又其反射中心、其他の諸點に就きて、人類一般に同樣なることを知つた處から、已れの腦髓の構造及び作用も亦同樣ならんといふ考より、一般に人類の心理的作用が已れの心理的作

用と同樣なるべしと推論するのである。然るに又他の有脊動物に就きて、大腦知覺神經等を研究した結果から、其の構造が人類のものと甚だしく相類似して居て唯分量と複雜の度のみが相異なれることを知りて有脊動物の心理的作用は吾人人類の心理的作用に比べて、發達と複雜の度に於ては欠乏して居るも同樣の有樣で進化したものなるべしと推論するのである。然れども更に下りて昆虫類に至り、甲殼類、獸体動物に至り、遂にアミーバに至りては其神經の組織は吾人々類の神經組織とは甚だ異なつて居るからして、此等の下等動物の心理的狀態に關する確乎たる結論を下するには、吾人は躊躇するのである。勿論下等の動物にも神經の纖維もあり、神經細胞もあるけれども、其排列の次第は人類の屬して居る哺乳類とは甚だ其趣を違へて居るからして、或は彼等の心理的狀態も人類の樣であるかも知れないが、先づ異類のものだと考へない譯には行かぬのである。

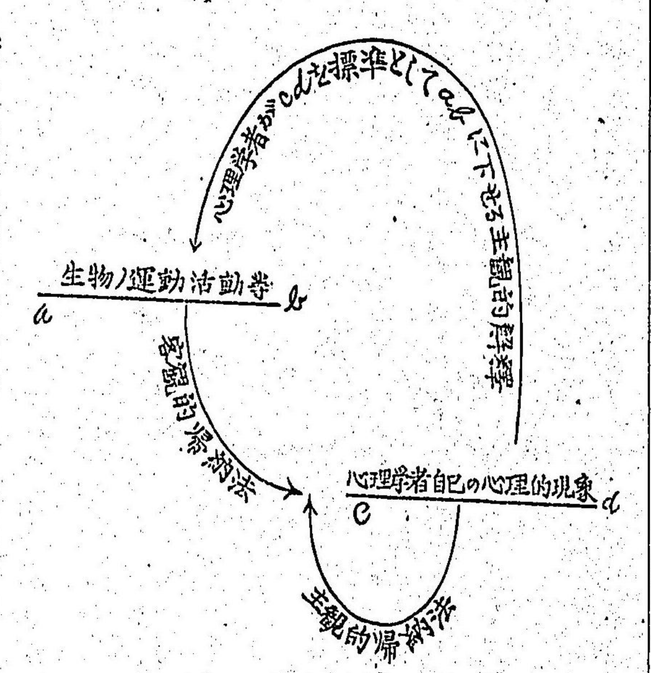
併し精細確實の點に就きては誰でも自己のものと同じであると斷言することは出來ないものである。同じ人類の内でも同じ國に生れ、同じ趣味と同じ經歷を持つて居る間柄では、互に其心理的狀態を知るには比較的に容易いが、外國人でありて經歷も違ふ間では、心情を知ることが甚だ難いのである。況んや大陸を異にし、交通もしない、文明の程度も違つて居る人の心情を知ることは猶更ら困難である。又同國、同風俗、同社會の中でも兒童といふのは其心情又甚だ知り惡いものである。兒童といふものはツヤラヌことに喜んで、見たり泣いて見たり、怒つたり、悲んで見たり、ろうかといふと時には又非常に鋭敏怜悧なこともありて、之を揣摩するに、甚だ困難である。此兒童の心理的狀態を研究するのは兒童心理學の任であり、其困難な理由は吾人が成人の位地にありて、兒童の心理的現象を解釋するからである。

以上の如くであるからして、普通人類の心理學といふても、聖人、兒徒、文明人、野蠻人、成人、兒童、狂人等の心理的狀態を殘らず解釋するものとすれば實に、甚だ困難なのである。

ろれで先づ心理學は手近き處から始めなければならぬのである。即ち出來得る限り精密周到に自家一身の心理的狀態を研究して得たる智識を總合して、自家の正

確なる心理學を建設することが必要である。扨て次に斯くて得たる結果を基礎として、己れと多少類似の點を有する他生物の現象に論究すべきものである。

扨て吾人人類以外の生物の心情を研究して得る所の結論は單純歸納法の結果でなくて、二重歸納法から得た所の結果である。二重とは何故かといへば、學者は先づ自家の心理的現象を觀察し、研究して、之によりて一般に心理的作用を解釋する法則を發見することが必要である。之をなすには勿論自家一人の觀察のみを用ふるのでない、他の人の經驗觀察をも參考して得たる事實より歸納的に結論を得るのである。之れが一つの歸納法である。扨て次に客觀界の現象即ち生理的現象殊に神經組織運動等の事實を觀察して、これ等の客觀的現象を支配する所の法則を見出さなくてはならぬ。之れが又一つの歸納法である。故に主觀的歸納法と客觀的歸納法と二重の歸納法があるのである。これから主觀的經驗によりて得たる法則を以て生物の運動活動等に於ける客觀的現象を解釋するのである。圖を以て之を示せば次の如くである。



兩者の歸納法元より大切であつて、何れも廢することが出來ないのである。併し客觀的に物理的事實より歸納するのは研究するに容易きものなれども、主觀的歸納は研究するに甚だ困難であつて、動もすれば誤謬に陷ることがあるから、最も注意して研究しなくてはならぬのである。

生物の運動活動等を解釋するに、大体に於て人類の心理的作用に類似するものとすれば、夫れにて實際の必要を充たすものである。一般普通に人が動物の動作等に就て解釋するのは之である。或は

馬が怒ッたのである、或は犬が喜んで居るのであるなどいふは此解釋法である而して最も善く動物の習慣、性癖等を熟知するものは、農夫、牧人等日々動物を取扱ふて居る人々であるが、此等の農夫、牧人等の解釋を以て直に動物心理の科學的解釋とすることは出來ない、農夫牧人等の知る所の事實は元より無用のものでない、極めて有用のものであるには相違なきも、其解釋は極めて我儘勝手なもので、想像が多く、組織をなして居らぬのであるゆえれで科學的と兩々相待ち、相助けて始めて稍々完全に近き結論を得るのである。

ろれであるから動物に就きて精細なる觀察をなすことも必要であり、動物の生物學上の關係も知らなくてはならぬが、又一般人類の心理學に就きて最近の研究方法及び其研究の結果は是非共熟知して居らなくてはならぬものである、而して動物の比較研究をなす上に吾人が原理として採る所の法則があるが、夫れは次の如くである

一つの動作あらんに吾人が之れを心理的定準の低位にある心的能力の活動の發現せるものとして解釋し得べきものは決して高等なる心的能力の活動の發現として解釋するを得ず、

といふことである。之れには隨分異論や批評もあるけれど、一つも其宜しきは得ないもの計りであつて、吾人には少しも痛痒を感せぬものばかりである。併し就中稍々道理ある非難は次の批評である即ち『現象を説明する上に簡單に過ぎて、更に遠大なる所に眼を開かしめざる樣になるべし、簡單であるのは宜い併し簡單であるから必ず眞理だといふ譯には行かぬ、若し簡單を貴ぶならば萬物を神が創造したといふ説が進化論などよりも更に簡單であるではないか』といふ批評がある若し吾人が進化論を離れて單に簡單なるものばかりを採るといふなら、此批評も尤もであるが、吾人は進化論を假定したる上に簡單なる法則を以て出來得る限り解釋せんとするのである

以上は本章の大要であつて、吾人も亦殆んど同意見であるから、別に彼れ是れ細評するにも及ばないと信ずる、而して著者は更に論歩を進めて、燒點的意識の現象に

就きて論じて居る。

第四章　提起と聯想

著者は既に第一章第二章に意識の波は焼點的と傍邊的との二種あることを論じたるが、本章に於ては暫く其傍邊的意識の現象を措き、專ら焼點的意識の現象に就きても論究して居る。而して著者は此章に於て提起と聯想と題して居る。扨て此「提起」といふ語は「ザヂェスチヨン」といふ語の譯字であるが、甚だ譯し苦ひ語であつて、通常は暗指と譯する語である。此處に用ひたのは其意義では明了でない、氏の用ひた意義は氏の所謂意識の波を起さしむる原因のことである、他語を以て云へば精神的現象を誘ひ起す動因のことである今は適當な譯語を見出し得ないから、暫く提起と名けて置く。氏は此提起を分つて二つにして居る、即ち初次の提起及び二次の提起である。意識の焼點は氏の論によれば全く大腦内部の一種の震動若くは攪亂である。此震動若しくは攪亂が精神的現象となるのである。然るに此大腦の震動攪亂を誘致するものに、初次の提起と、二次の提起とあると區別したのである、故に氏の所謂「ザヂェスチヨン」は刺戟といふても宜い、刺戟は精神的現象を誘致するものであるからである。

扨て初次の提起とは如何なるものに名つけたかといふに感覺神經を通りて刺激を傳ふるもの即ち精神的現象を誘起する外部の刺戟である、二次の提起とは嘗て一たびは外界より來りたものなるが、既に意識の波となつて更に腦髓を影響して、次來の精神的現象即ち意識の波を起すものである、即ち意識作用を誘致する前起意識に名けたのである。然るに單純に外界の刺戟を受くるにしても、大體に於ては人皆な同樣であるが、細かしき點に至ると各人皆な別々であつて等しくない、これは何故であるか之を制決する條件に就きて氏は二々條を擧げて居る、即ち

一、遺傳したる腦髓の構造若しくは腦髓が心理的に相關する心的本質、

二、個人的の經驗が此腦髓の構造若しくは心的本質に印したる變化

である。簡單にいへば、第一條件は腦髓の遺傳的構造であつて、第二條件は各個人一

々の經驗であるとしたのである。卽ち著者の所謂此等二條件は刺戟を受くる方、換言すれば主觀的の條件である。併し予は腦髓の構造の外に一般に身體の生理的事情にも亦關することゝ思ふ。されば著者の如く腦髓の遺傳的構造及個人の經驗と狹く限定するよりも、生理的事情と心理的事情とによりて印象が制決せらるゝものとする方が宜い樣に思ふ。

次に二次の提起によりて誘致せらる意識の波の制決するものは何か、之に對して氏は次の如くいふて居る。

意識の波は以前に通過せる道程を繰返さんとする傾向を有するものなり、されば第二の提起によりて起る意識の波も此傾向を有す云々、

卽ち後起の意識現象は現起の意識現象によりて支配せらるゝものであるとして居る。かく直接に外界の刺戟によらずに、思想より思想を生ずる――術語を以て之をいへば觀念より觀念を生ずるものを聯想といふのであるが、氏の意見では彼の初次の提起より生じたものを印象といひ、第二次の提起より生じたものを觀念といふのである。

次に氏は初次の提起より生じた印象と、第二次の提起より生じた觀念との性質を比較して、次の如く論じて居る。

印象は比較的永續的のものにして、意識の波は明了完全なるものなるも、第二次の提起によりて生ずる觀念にありては意識の波甚だ不明了不完全にして其繼續する時間も甚だ短かし、是れ特に兒童に於て然るものにして、忽ち彼を考へ、忽ち此を考へ、千變萬化して殆んど捕捉することの出來ないものである。是れ實に兒童教育の困難なる所以である云々。

意識現象の完全にして明了なると否と、又其繼續時間の長きと短きとは、印象、觀念共物の性質でなくて、寧ろ之に注意を向ける强弱の如何によることゝ思ふ。

氏は次に聯想の事を論じて居るが、其大要は現時多くの心理學者の一致する所であつて、さまで異論のないことである今其大要をつまんで云へば、次の如くである。

聯想を分ちて二種となす、卽ち

一、接近によりての聯想、

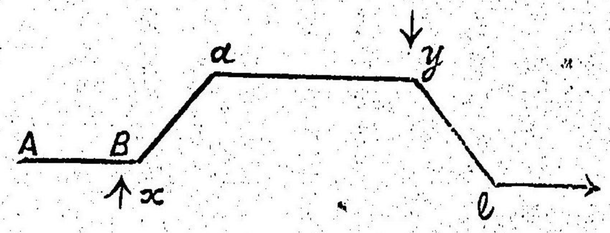
二、類似によりての聯想、

此外更に又對稱によりての聯想を第三に置く學者もあれど、之は別に置く必要もなきものである、何となれば、對稱といふのは畢竟同種類でなくてはならぬからである、

第一の接近によりての聯想の法則は次の如く解釋することが出來る、即ち若し或る二つの燒點的意識狀態 a と l とが連續せる印象として意識中に顯はれ、其後 a が印象として或は觀念として再現することあるときは、以前と同樣なる傍邊的意識狀態の下に l は觀念となりて再び出現すべしといふのである例へば、電光を見て雷鳴を思ふは、當初には電光は眼より雷鳴は耳より入りて、兩者間に同樣なる點なきも、經驗を重ぬるに從ひ、電光を見れば雷鳴を聯想するが如きは此接近によりての聯想である、此接近によりての聯想には次の事が必要である、

第一に、聯想連鎖の比較的永續するは不變の生理的事情の如何による

第二に、若し生理的事情が相等しきときには(イ)最初の經驗せる時に於ける興味



の多少(ロ)經驗の新舊(ハ)經驗せし度數の多少によるものである、之を、波形を用ひて顯はさば、上圖の如くである、即ち、

全圖形は意識の波の進行を示せるもので、始めABの方向に進行し來りしものが、Xなる刺激又は他の原因よりして a なる印象若しくは觀念を生ずるときは、嘗て a l とが連續して印象として顯はれたることあるが爲めに、此度も l なる觀念を再現せしむるのである。

次に類似によりての聯想は如何といふに、意識の燒點的狀態が互に相類似するものあり、且つ、一つの燒點的狀態が印象若しくは觀念として再現するときは、他の燒點的狀態は觀念となりて再現するのである之を類似によりての聯想といふのである。然るに類似といふ語は甚だ漠然たる語であつて、如何なる點に於て類似するかを明答すること出來ざるも、何か類似せる所があ

るといふのである。されば此類似によりての聯想は次の如く云ひ表はすが宜い

若し二ヶの燒點的狀態が共通の要素を有するものあれば一方の再現は他方の再現を誘致す。

此類似によりての聯想を細分するときは(一)同類によりての聯想(二)關係の類似を知覺することによりての聯想(三)對照によりての聯想である。第一の同類によりての聯想は最も簡單なる原始的のものであつて、赤色のものを見て赤色のものを聯想するといふ如きものである。第二は二つの燒點的狀態aとlとの關係が他の燒點的狀態lとmとの關係に類似する場合にはaとlが再現せば、bとmとの再現を誘致すといふのである或は簡單に相似たる比若しくは變遷は他のものを誘致すといふても宜しい。第三の對照によりての聯想は多くは此類似によりての聯想の變形と認めて宜しいが、又接近によりての聯想と類似によりての聯想との結合より生ずることもある。故にこれは別種として分類する必要を認めないのである。

意識の燒點的要素が正規に判決せらるゝには、次の三通あり即ち

第一、聯想は初次提起に於ける外界刺戟の如何によりて側決せらる。

第二、聯想は前起の腦髓の攪亂せる所の意識狀態によりて側決せらる。之には燒點的なるあり、傍邊的なるあり、又兩者の聯合なるあり。

第三、聯想は又閾下意識狀態の如何によりて側決せらる。

以上は聯想に關する一般の解說であるが、大体は普通一般の議論で、別に批評すべき點もないのである。著者は更に進んで動物の觀念聯合を說て居る。即ち第五章に論述して居るのは實にこれである。

第五章　動物に於ける觀念聯合

本章は題して動物に於ける觀念聯合といふ。前章には人の思想に觀念の聯合といふことがあつて、思想が連結することを論じた。實に聯想は人の精神作用の大部分を占めて居るもので、英國には聯想學派といふものあつて、凡ての精神現象を悉く過去の聯想を以て思ひ起すものと說明して居る。獨逸のヘルバルト學派も此傾き

がある。本書の著者も何れかといふと聯想學派の樣である。併し此學派は今日ではヘルバルト學派と共に困難の位置であるのである。扨て本章に論ずる所は動物も人類と等しく此觀念聯合があるか否かといふことである。動物といふのは凡ての動物をいふのでない。高等動物に就きての問題である。先つ氏は次の如く論じて居る。

動物にも意識の波の存することは何人も疑はざる所であらう。勿論此意識といふ語に就きては或は異論を唱ふる論者もあるならんが、併し予は此語を極めて廣義に解釋したのである。猫が小鳥を狙ふときには慥かに此意識がある。而かも燒點的意識と傍邊的意識と兩者存することは推論することが出來る。

然り動物にも物質的現象に對する精神的現象を有することは明かなる事實であつて、反對を唱ふる人はなきことゝ思はる。されば其精神的現象の波の如く變遷するが故に、之を名けて意識の波となすは亦不可なることでないのである。然らば人類の意識と動物の意識とは、如何なる點に於て異なるか兩者に種類の相違ありや、又程度の差異なりやといふに、氏は、

唯、動物の意識の波は人類のそれに比して遙かに單純なるのみである。而して動物も印象と觀念とを有して居る。其に意識の波に於て燒點的要素に名けたるものである。

と論じて居る。氏は次に前章に論じたことを繰り返して印象は初次の提起により觀念は聯想なる第二次提起によりて誘致せらるゝことを論じ、動物に於ても亦然りといふて居る。次に動物にも聯想作用ある證明として氏自身が鷄の鷄に施した實驗を記載してあるが、其一二を次に載せるのも無益でなからうと思ふ。

鷄の孵化して十八時間經たるものに其糞塊を與へたるに雛は續け樣に三度嘴を以てつゝつきて之を啄みたり、しが、軈て頭を振り嘴を地に拭ひたり。其後十分程經て再び其糞を與へしに、之を啄ばまんとして嘴を向け、既に糞に嘴が達せんとせしに、俄かに止りて其嘴を拭ひたり。其後度々之を與へしも益々之に遠かり遂には見向きもせぬ樣になれり。

氏は以上の實驗に於て鷄が能く視覺の印象を以て味覺の印象を聯想し得たもの

として居る。扨て此くの如き聯想は何種の聯想なるかといふに、氏は之を接近によりての聯想として居る。氏は次に聯想の動物の生存上必要なることを論じて、次の如くいふて居る。

動物の幼時に於て、觀念の聯合は甚だ必要なるものである。經驗は行爲(廣義に云ふ)の案内となるべき手段、實に單なる手段に過ぎない、如何に屢經驗を反覆するも、若し聯想生せざるときは更に何等の利益なきものである。

假令ひ鷄の雛が四十回毒虫を啄みて、四十回其虫の苦味を感じたとするも、其虫を見て之を食ふ前に、其苦味なることを思ひ起さしむる所の聯想作用なきときは、四十回の經驗は更に何等の實益なきものである。親鳥の教育は唯、此聯想作用を生せしむる導きとなるに過ぎない。而して聯想の連鎖は他のもの代りて作ることの出來ないものである。如何に完全に、如何に長き間教養せらるゝも、自身に聯想を作るでなければ何にもならぬものであつて、自身の生存の導きとなさんとするには、己れ一個にて其聯想を作らなければならない。

氏は常に經驗を貴ぶが、此所には數百回の經驗あるも聯想作用が起らなければ實益ないといふて居る。是れ至極尤なことである併し氏は其聯想は經驗より來るといふ論であることは前章で明かなれば、氏は自家撞着に陷つて居る樣に思はれる。成程經驗は必要には相違ない、併し經驗は何によりてするか、且つ經驗は個々別々で、少しも統一がない、思想には統一がある。若し單に經驗よりのみ來るといはゝ、凡て精神的現象は個々でなければならぬ。統一作用は説明することが出來ない。是れ常に經驗論者の苦む所である。

扨て動物は接近によりての聯想であるとして、類似によりての連想はなきか之れ頗る解し難き難問である氏は之を自問自答していふて居る。

實驗に於て二度迄密蜂に懲りたる鷄の雛が密蜂に甚だ似たる蠅を避くるは、蠅は密蜂に似たれば之も苦味なるべしと聯想するにあらずやと思はるゝ點もあれど是れ甚だ解し難き問題である。雛が果して上の如く類似によりての聯想を起したるなるか、又は蠅を蜂と思ふて其苦味を聯想したるものなるかは、雛其物

でなければ分らぬことである。併し何れが蓋然なるかといへば、蠅を蜂と考へたるものと考へざるを得ない。即ち類似によりての聯想の結果でなくて、接近によりての聯想の結果とする方が蓋然の度が多い。

其理由として氏は倣爲のことをいふて居る。倣爲とは動物に於て外敵防禦の機關を有するものゝ形狀色合に似せて他の動物の形狀色合をなせるをいふが、若し動物にして類似といふ考を持ちて居るとすれば、折角他の動物に似せて外敵を防禦せんとするも眞の防禦機關を有するものと有せざるものとを區別せらるるが故に、何等の効力なき樣になるべしと論じて居るが、之は少しく無理な論と思はれる。何となれば十分種々の機能が發達せる人間でさへ倣爲には欺かるゝことがある。之が爲めに欺かれたといふて類似によりての聯想がないと推論するは餘り早計な樣に思はれるからである。

第六章　記憶

本章には記憶の事を論じて居るが、氏は精神の把住力を拒否する說である。元來此記憶に關しては古來の學說種々にして、今日にても未だ一定して居らないのであるが、大體に於ては生理的に說明するのである。生理的に說明する上にも把住力を頭腦の作用をする學者と神經末端の作用とする學者とあるがモルガン氏は頭腦中の神經組織の或る變化とするのである。而して嚴正の意味にして把住力といふべきものなしといふ論である。唯々或る印象が腦髓中に起れば、即ち外界の刺戟によりて神經組織を攪亂すれば腦髓の神經組織は其攪亂によりて一の印象を生ずると同時に、其攪亂の影響を受けて惱髓の神經組織が或る變化をなして、後來其印象を生じたると同樣の事情の下に、相似たる觀念を再生し易き樣になるのであると論じて居る。氏は例を擧げて說明して居る。即ち印象又は觀念の初めて生じたものは恰かも音聲の如きものである。而して腦髓の神經組織は恰かも蓄音器の如きものである、人が蓄音機に向つて物云ふときは其音は空氣の震動を惹起し、直ちに消失して再び生ずるものにあらず又名の如く音聲が蓄音機中に實に蓄へらるるに

もあらず彼の圓筒中に音聲の潜伏して居るにもあらず、然れども蓄音機に向つて物云ふときは、其音聲即ち空氣の震動の影響を受けて圓筒の蠟に波形を生せしむ此波形によりて即ち印象せられたる音波の作用によりて再び同樣なる音聲を發し得る樣になるのである。記憶の把住力は恰かも蓄音機の圓筒上に印象せる音波の如きものである腦髓の神經組織は恰かも蓄音機の圓筒樣の如きものであるといふのは氏の論である。成程面白き説である、一應は面白きも、同樣なる事情といふのは、如何なる事情をいふのであるか、甚だ曖昧な語である。吾人は注意を向けて過去の心象を想ひ起す、是れ記憶力であるが、想ひ起さんと注意を向けるのは氏の説によれば過去に其心象を生じたときの事情と同樣の事情にすることになる、併し別段同樣の事情と思はる點もない、且つ攪亂によりて神經組織に變形を生ずるといふが、是れ想像に過ぎないのである、解剖學上別段にさる變形を認むることが出來ない、氏の説では、一たびさる印象により腦髓に或る變化を生ずれば再現し易き傾向を生ずるといふが、單に傾向位ならば、吾人が經驗の上に經驗を積みて知識

を增すといふことは甚だ困難になる、何となれば、再現すべき傾向より一たびは注意を向けて再現せしめ、其上に新經驗を重ねざるべからざるのである、換言すれば、一々の經驗に過去の生理的變化を精神的心象に直して其上に新知識を加へなくてはならない氏の蓄音機の例を以てすれば、先づ蓄音機を運轉せしめて音聲を再現せしめたる上に、他の音を維へなければ新音を生ずることが出來ない、傾向の上に新經驗を加ふるも一は生理的現象で一は精神的現象では、數學上にて種類の異なる量を加ふるが如く、大さと長さとを加減するといふ如く、其意義は無意義である。新經驗を加へて知識を增す上には過去幾千百の傾向、生理的變形を心象に再現せしめた上でなくてはならぬ、これも吾人の精神的作用が常に少しづつ捺合した上に更に新經驗を加へること、一と二とを加へた上に、三を加へ、其和に四を加へ、其和に五を加へるといふ樣になつて居つて、或る一定數の心象が未だ心象として存在する間に、即ち氏の説にて之をいへば未だ傍觀的意識現象たる性を失はざる內に、其等を捺合して置いて、生理的變形となし、又其上に他の一組より捺合して他の生

理的變形となし、茲に前の生理的變形と新なる生理的變形とを混和し、揉合して、新生理的變形となして神經組織を影響し、次第に斯くの如くなつて行くとでもいふなら宜い。氏は左樣な事をいふて居らぬ、又實際に左樣なことがない、されば新經驗を積みて知識を增すことを說明する上に困難は免れなからうと思ふ。又數分間內に過去幾十年間の經歷を夢みたといふ例は古來隨分ある。若し氏の說の如く、生理的變化の同事情の下に再現し易き傾向が把住力とすればかゝる實例を說明する上にも、大に困難を感ずることゝ思ふ。併し此事は氏のみを非難する譯には行かぬ。把住力のことに關して今迄心理學者の中十分滿足なる說明を與へた人がないのである。而して近來は多く之を生理的に說明する傾になつて居て、之に代るべき說とてはないのであるから、亦已むを得ないことゝ思ふ。ろは兎に角氏が本章に論じて居る大體の主旨を略記すれば次の如くである。

把住力の長短は次の條件による(一)一個人の腦髓の構造の如何(二)印象或は觀念の親疎(三)印象或は觀念の單純なるか復雜なるか、是等三個の條件によるのである。

印象及び觀念が意識より消失する時間は其種類によりて不同がある、最も速かに消失するものは感覺であらう、內省、反省、其他一般の思考に至つては、消失することが遲い、若し速かに消失するならば前後の關係を附することが出來まい、他人の談話を聞くときに、一句の終を聞くに猶ほ能く前の部分を意識に有するが故に了解することを得るのである、然れども甚だ長きときは前の部分を忘却するが故に了解することが出來ない。眼を用ひて書を讀む場合には、眼球の迅速なる運動によりて消失せんとするものを再現するが故に、前後の關係を失ふことが少ない。

情緒によりて强く激動せる觀念は最も消失し難きものである、怨恨、忿怒、悲哀、戀愛等の如きは者な然りである。

以上は之を初次の記憶と名けるのである、刺戟を受けたるもの又は他の意識より誘致せられたる觀念が始めて現はれ、消失しないのをいふのである。以上は又之を表現とも名づける、之に對して一旦消失せるものが、再び表現せるものを再

現と呼ぶ。表現と再現との差は、大體に於て四つある(一)再現は明確活潑と強度とに於て表現に及ばず(二)再現は表現の場合に生じたる傍邊的のものに更に多くを附加す(三)再現は永續せず(四)再現は合理的根據を有す。

此内第二は珍しき論なれば、解し易くせんが爲めに、氏の説明を擧げて置かう

或る意識狀態 A^{c}_{b} なることありとし、其内Aは燒點的のものにて、bcは傍邊的のものとせば、此意識狀態が一旦消失して再び現はる場合には、即ち記憶する場合には、A^{cc}_{bd} となりて現はるゝのである即ち傍邊的に於てdcなる新要素を附加し、是れ以前の意識狀態には何等の關係なきものである然るに再現すること屢ばなるときは、遂にbcなる傍邊的狀態を失して A^{c}_{d} となり、以前の意識狀態としては、其根本的要素たるAのみを再現することに至り、凡て他の傍邊的のものは新意識の傍邊的狀態にして以前のものとは更に何等の關係がないものである。

記憶には二つの條件を要す(一)印象若しくは觀念及び此等に附隨せる傍邊的狀態の復活(二)何物かを把住し、後來之に依りて能く復活をなさしむるもの。

把住するものは何か、是れ前に論じた所であつて、氏は彼の蓄音機の例を引きて説明した所のものである。又把住力は人々によりて強弱甚だ異なるものであるが、之を強大にするには注意と訓練によるのみであるといふて居る。次に氏は

把住力は管に人によりて異なるのみならず、又神經組織の狀態によりて異なるものである。神經の疲れたるときは、然らざるときよりも把住力は少ない、又朝に受けたる印象は夕に受けたる印象よりも強い、又少年は老年よりも強大である

把住力と回想力とは甚だ密接の關係があつて、分つべからざるものである。然れども研究上便宜の爲めに二者を分つのである。

又記憶の種類には二つある。第一は偶然記憶、或は無系統記憶であつて、第二は系統的記憶である。前者の記憶は外國語、歷史の年代文法の例等を學ぶに適し、後者の記憶は科學的知識を有せしむるものである。又前者の記憶は接近によりての聯想及び類似によりての聯想を甚だ速かに且つ確乎に作り得べき性質のものであつて、後者の記憶は關係の類似を知覺することによりて生ずる聯想を作り

得べき性質のものである。第一の記憶は訓練演習を用ひて發達し得べきものなるや否やは疑問に屬するけれども、系統的記憶は練習によりて之を強くすることが出來る。

記憶には時を區定するものがある。或る事を記憶するとせば、其事は何時生じたりしか等の考を含むことがある、又何所にといふ考も含むことがある。

吾人は本章に於ての氏の語の用ひ方には多少の混雜があると非難せざるを得ない、氏は吾人の心象を「プレセンテーション」と「レプレセンテーション」とに分つて居る（前者を表現後者を再現と譯して置いた）前者は刺戟より生ずる印象と夫より生ずる觀念とに名つけ後者は其印象及び觀念の再生したもの、卽ち再現觀念に名けたものであつて、而かも氏は記憶と再現觀念とを混同して用ひて居る樣に思はれる、かく分つよりも知覺と表象とに分つのが正當である。氏の所謂印象と觀念とは感官によりて生ずるもので知覺である。氏の再現といふものには通例の表象と記憶により生ずるものとを混同して居る。記憶によりて生ずるものと表象とは決して混同すべきものでない。記憶は勿論一種の再現觀念には相違なきも、前者は後者よりも範圍の狹いものである、表象は一般に抽象的のもので、記憶は稍々具體的のものである、過去の事實を變化することなく其儘再現せしめたものである、若し之に變化の心的作用を加へて取捨したるものとすれば、是れ記憶でなくて想像である。想像力と記憶力とは自ら異なる作用であつて、如何なる心理學者も分ちて論じて居る。

第七章　動物に於ける記憶

記憶の成立は觀念の聯合の中に含まるべきものである。之を換言すれば觀念の喚醒の中に含まるべきものである。何となれば觀念は主に第二の提起により起る所の表象であつて而して表象は印象として出現したことのあるものを觀念として復活するのであり、而して此復活は實に記憶の一方面であるから若し動物が觀念を有すとすれば必ず記憶をも亦有せざるべからざるものである。從つて動物の腦髓中にも恰かも吾人に於けると等しく觀念の把住力と一般名づくる所の解剖的

生理的根據がなくてはならぬのである

加之實際の觀察上にも動物は實に記憶を有するものである。一たび蜂に懲りたる鷄の雛が再び蜂を食はぬのは宛かも一たび指を燒きたる小兒が再び火に觸るゝことを避くると同じく、記憶力があるからである、ダーウィンの犬が主人の五年間航海をなしたる後に能く主人を記憶して居た事は有名なる話である。

又動物を訓練する人は能く其記憶を有することを知りて居ることであつて、犬などにても其記憶力は個々によりて別々である。或は覺ゆることの早き代りに忘るゝことも早きものもあり、或は中々覺えの悪きものが一旦覺へ込みたる後には容易に忘れざるものもある。

予は動物の記憶は無系統記憶だらうと思ふ、系統的記憶は動物には六ケ敷ことである、此事は後章に動物の關係知覺を論ずるときに讓らうと思ふ、今は唯系統的記憶は關係を知覺することに基くものであつて、眞實の智識の根據となるもので動物にはなきものだといふことに止めて置かう。之に反して無系統記憶は

感覺經驗の根底となるべきもので智覺(五官等の)の基礎となるものであつて、動物の有する記憶は此記憶であると思ふ。

動物の記憶には時を區定することあるか否かといふ問題がある、之は動物が能く時間の關係を知り得るか否かの問題を決した上で論ずべきことゝ思ふ。

或は動物は時間の經過を感知することが出來ると唱ふる論者がある、予の知人に猿を飼ふ人があつたが、食物を與ふるに一定の時を定めて、其時以外には與へざることにして居つた。然るに若し其一定の時に食物を與へないときには、食器を打ち鳴らし、呼び狂ひなどしたといふことである。此は猿が時を區定せる樣なれど、又能く考ふれば一定の時にのみ食物を與へた爲め、胃の作用が時間的になつて、其時になりて食欲を感じたから、さることをなしたとも解說することが出來ると思ふ、即ち直接の聯想より時間の經過を感知したものだと說明することが出來る。

人類にても極く幼稚の時には時を區定する能力があるといふことを證明すべ

き事實がないから、況んや動物にはなきものと思はる。凡て動物の記憶は日常實際の必要上より生ずるものである、然るに動物の生活を見るに唯々現在の如何によりてのみ動作するものであつて、別段時を區定する必要がない樣である。茲に起る問題があるこれは動物は場所を區定する能力があることは事實であるが、既に場所を區定する以上は、時を區定することも出來るではないかといふ疑問である。此疑問は何處といふ場所の解説の如何によることであつて、若し單に接近によりての聯想より得た所の場所といふ考へは彼等動物にもあることで、其記憶はあるであらう。併し一般に場所といふ關係に至りては甚だ疑はしきものである。是は又後章に關係のことを論ずるときに讓らうと思ふ。

以上は本章の大体でありて、前章に説ける所と異なりて甚だ適當に論じて居るといふて宜しい。

第八章　印象の分解

本章は題して印象の分解といふ、先づ表現と再現とを分ち次の如く論じて居る、

印象は外界の刺戟により吾人の感官を通じて、腦髓に一種の震動攪亂を與へたるものであつて、觀念とは此印象若しくは他の觀念が腦髓に及ぼせる影響により生ずるものである。前者即ち印象を表現と名くれば、後者即ち觀念は之を再現と名くべきである。而して印象、觀念共に腦髓の燒點的狀態をなすものである。

次に視覺、聽覺等の五官に就きて一々例を擧げて印象と觀念とを説明し、觀念は聯想より生ずることを述べ、又各感覺機關の長短を論じて、

各特殊の感官の印象中にて、視覺より來るものは最も明了に規定せられ、而して最も勢力ある印象を與ふるものであると論結して居る。是れ固より何人も共通り考ふる所である。次に、觸覺は常に視覺を助け、視覺より生ずる印象を確實ならしむるものである、聽覺は意識の範圍を擴張し、又吾人々類に取りては言語の交通によりて、一般の告知の通路たるものである、嗅覺、味覺、溫覺は此關係に於て第二流に下るべきものである。

と論じ、更に視覺に戻りて、細かに視覺の生ずる所以を説明し先づ物理學に入りて日光は吾人の知覺すべからざる迅速なるエーテルの震動より成りて、其中一秒毎に四億回乃至八億回の震動をなすものは吾人の眼に映じて色となりて顯はるゝも、四億以下の震動は熱となり、八億以上のものは化學作用となつて、吾人の視覺を直接に刺戟することなく、而して吾人が種々の色を見るは此無數の太陽の光線物質に投ずるときに、或るものは吸收し、或るものは反射し、其反射する多寡によりて種々の色を現ず、

と物理學上の理論を引き、次に此エーテルの震動が如何にして有機體の視覺に達して影響を及ぼすかを生理學より論じ、更に心理學に轉じて視覺とは何なるかといふ問題を提出して、之に定義を下して

知覺とは分解すべからざる心理的元素にして、直接に一個若しくは數個の結合せる感應刺戟より生ずる、

となし、視覺は心理的分解の最後のものにして、之よりは更に分解すべからざること、宛かも化學の原子、物理學の分子の如きものとせるのである。氏は茲に菫菜（スミレ）に對する吾人の精神的現象に就きて説明して居る。其大略は次の如くである。

意識的狀態を分解すれば、先づ印象と觀念と二つの要素を得られる。次に此印象を分解すれば、例へば菫菜を視るときに生ずる印象を分解すれば、其内には色、陰形及び其位置等を得、更に之を分解して色の要素を取れば、心理學上には分解すべからざる菫菜の感覺に歸着すべし。而して心理的分解は茲に其終りを告ぐるものである。更に進みて分解するときは最早心理的性質を失して、生理的分解となり、更に分解を進むるときは生理的性質をも失して物理的現象となる。

次に聽覺に就きては如何、聽覺に關しても生理的に空氣の震動が如何に鼓膜を刺戟して感覺を生ずるか、又耳の構造に就きて説明して居るが、終局聽覺に感ずる所のものは又心理的に分解すべからざる最も單純なるもので、嘆音の如きは物理學上には種々複雜なる震動より生ずるものなるも、心理的には分解の最終點であることを論じ、觸覺、味覺、嗅覺、温覺に就きて何れも心理的に最も單純なる元素なるこ

とをいふて居る。次に

痛感に就きて一言しなければならぬ。今云ふ所の痛感とは狹義に用ひたるもの、であつて快に對するものではない。例へば皮膚を抓けば痛みを感じ、又皮膚を熱すれば痛みを感ず、之を痛感といふのである。而して此痛感を感ずる神經末端は觸覺、溫覺のものに比較すれば、皮膚の深層に存するもの、如く、觸覺、溫覺等の神經とは全く別物なることは證せられて居る。病により、又或る藥を用ひて、溫覺、觸覺、痛感が別々に影響することを實驗することを得た。快不快は寧ろ感覺の屬性といふべきものなるが、是れ亦最も單純なる形式である。今謂ふ所の快不快とは極めて單純なるものをいふのであつて、熱天に水を浴し、又寒天に溫暖なる室に入るとき等に感する心的狀態に名くるのである。彼の早朝鳥の歌を聞き菫菜の香を嗅ぎなどして快を感ずること、又蛇を見て不快を感ずるなどは、種々の聯想より來るものであつて、今云ふ快不快と異なるものである。

苦痛を觸覺視覺等の如く一の感覺とするは、米國の或る心理學者間に勢力ある說であつて、ニコルス、ストロング等の熱心に主張する所のものであるが、是れ未だ一種の臆說たるに過ぎない、隨分缺點のある學說である。モルガン氏が之を採用したのは、畢竟するに、氏が餘りに一元論に傾き過たからである。凡そ人類の性情として統一を欲して多元論を嫌ふ傾あるので、强ひて多元を一元に歸せしめんとするのは、多くの學者の屢ば陷る誤謬である。氏も慥かに此誤謬に陷つて居るのである。前にもいふた通り、氏は餘りに經驗論に傾き過ぎて居る。凡て精神的現象を感覺より解釋せんと勉めて居るが、之は無理である。何となれば、感覺は何處まで行ても感覺である、各感覺が腦髓に映じたものとすれば、吾人の知識は切れ々々でなければならぬ、吾人は個々の經驗の上に統一作用がありて始めて知識を得るのである。氏は又快、不快を感覺の屬性といふて居るが、之も一元論に傾き過ぎて、凡ての精神的現象を感覺の一本槍で說明せんとするより生せるものである。快、不快を感ずるは感覺作用ではない感情である、勿論現今にては精神の作用を智情意の三つの全く獨立せるものとなす人はない、何となれば、精神の作用には常に此三つの要素を

合著して居て、單獨に智なり、情なり、意なりのものはない。畢竟するに三つの中熟れが最も其大部分を占めて居るといふ區別である。されば古來の學者の如く三つのものが全く獨立して居ることは許されぬ。併し吾人の思想上に分析した日には、此三つのものは又明かに區別せねばならぬのである。是れ其根本的性質に於て異なつて居るからである。ろこで感情と感覺とは其根本的の性質に於て異なつて居る今其大體の差別を二三擧ぐれば、第一、感覺は何人にも通ずる性質である。例へば花は誰にても花と見え、鳥は誰にても鳥と見える。尤も花又鳥といふ觀念は或はないものもあらん。兎に角、誰にでも白は白、黑は黑と客觀的に眞實である。感情は之に反して同樣の刺戟に對しても、人によりて異なる場合が多い。第二に感覺は特殊の機關があつて之を感ずるも、痛戟には特殊の機關がない。第三に感覺は之を繰返す程明了になるものであるが、痛感は繰近せば其度を減ずるものである。此等の理由より快、不快を以て感覺の屬性となすことは許すべからざることである。

次に氏は有機的感覺に說き及ぼし、而して疲勞は此有機的感覺の變體なるべしといひ、又一般に筋肉感覺といふて居るものは寧ろ運動感覺と呼ぶ方が適當だとして居る。これは別段差障ない議論である。

第九章　總合及び連關

前章に於てモルガン氏が印象の分解に就きて論じたことは、吾人の精神的現象の中にて知的作用の分解である氏は感情及び意思のことに就きては餘り論じて居らぬ。感情の根本的要素である所の快、不快に就きては、感覺の屬性として論じて居るが、其他一般の情緒等のことに關しては更に一言も論じてない。又意思に關しても少しも論じてない。故に感情、意思は如何に見て居るかは知ることが出來ないのである。兎に角氏が所謂印象の分解といふものは知的作用のみに關しての分解である。本章に於て總合及び相互間の關係として論じて居ることも、從つて知的作用の總合及び相互間の關係である。否、感覺に付ての總合及び相互間の關係であつて、感情及び意思には更に關係なきことである。先づ著者は二眼觀のことを論じて

居る。即ち通常人類及び高等動物には二ツの眼があつて二ツを用ひて物を見るが、一物は一物にしか見ねない。之を何とも思はず通常のことの如く世人は考ふるも是れ實に研究を要すべき問題である。一物に對し左眼より入り來る所の映像と右眼より入り來る映像とは、精密に云ふときには異なつて居る。然かも一物と見るのは何故であるか。二つの映像の總合するのは何所であるか。之に付きては學者間に二つの説がある。一は左右の網膜の後方に於て二ツの映像が結合して、神經中樞に至るとする説と、他の説は元來は二ツの映像は二ツに見ゆべきであるが習慣で一ツに見ゆる樣になるのであるといふのである。前説は本性説で後者は經驗論者の唱ふ説であるが、モルガン氏の考は上二説とも異なりて居る樣に思はれる。又視覺に於て物の厚さ、廣がり等を知覺するのは其物を見る爲めに眼球を適合せしめんと努むる所の運動感覺(筋肉感覺)の助けによるとして居る。氏は五官中にては視覺と融覺とを最も大切なものと見て居る。而して視覺にも運動感覺の助けを得て完全なる視官界をなし、觸覺も亦運動感覺の助けを得て完全なる觸官界となり、視官界と觸官界と相連合し、相補助して外界を知覺するものとして居る。氏は聽覺、嗅覺、味覺等より生ずるものを第二流のものと認めて居り、而して凡て此等感覺の總合錯雜せる活動によりて通常の經驗をなすものであると論じて居る。

吾人が前にもいふた通り、感覺は何所まで進んでも感覺である。個々別々の感覺であるから、吾人の精神的感覺が若し感覺よりのみ來るとすれば、個々別々更に統一なきものでなければならぬ、是れ實際の事實と相反することであつて、吾人の知識を認むる上には、是非感覺以外に統一作用を認めなければならぬことを論じてあつたが、氏は是迄全く經驗の一元論を唱へて居つたにも係らず、茲に至りて總合作用を認めなければならぬ必要があつて、總合的活動といふことをいふて居る。即ち

凡て是等聽覺界、嗅覺界、温覺界、及び運動感覺界等は其重要なる點に於ては第二に位して從屬的なれども、皆多少視覺觸覺の兩界に必ず連關するものである。而して錯綜せる日常の實際經驗に貢献するものである。而して凡て悉く總合的活

動により調和せる全體に結合す。蓋し此總合的活動なくんば、意識的狀態は決して起らぬものである。

然り、實に總合的活動は是非なければならぬのである。是に於て氏の一元論は氏自ら之を破つたものといはなければならぬのである。而して其總合的活動は如何にして起るか、又何物であるかは、氏は別に論じて居ない。併し其事は心理學の範圍外であつて認識論上の問題であるから、別に論じてないのも、然るべきことである。唯々精神的作用中には此總合的活動があるといふことを認むれば、夫れにて十分分であるのである。

第十章、動物の感覺經驗

本章には動物の感覺經驗を論じて居る。モルガン氏は既ね前章に於て吾人々類の心理的現象の根底を、感覺與料の錯綜せる連合よりなる感覺的經驗に歸してあるから、動物(高等動物)の心理的現象の基礎をも亦此感覺的經驗に歸するは左もあるべきことである、言ひ換ゆれば、氏は心理的現象の原始的要素を感覺に置く説である。是れ英國にてはベーン、獨乙にてはミュンステルベルヒ、ヴント等の説く所と同一徹である。元來彼の智情意と三分した上で(此三分法は今日にては異論を唱ふる人もあれど、)心理現象を研究する上には甚だ便利なる見方に相違ない)何れが最も原始的要素であるか、何れが根本的であるかといふ事に就きては、古來の學者間に諸説紛々として一定しないのである。或は觀念を以て凡ての精神的現象を説明せんとする學者もあり、或は意思の原始であると論ずる人もあり、或は情を以て根本的だと唱ふる論者もあるので、一定して居ない。兎に角モルガン氏は知的要素即ち感覺を以て原始的根本的心理的現象とするのである。

氏は此章に於ては重に熟練の事を論じて論る。其大要は次の如くである。

動物の熟練程實に巧妙にして、嗟嘆せざらんと欲するも、得べからざるものはない、而して動物が熟練を得る樣になつたのは動物各個の感覺經驗より得たものである。既に感覺經驗より得たものだとすれば如何にして、如何なる有樣で得た

かを研究しなくてはならぬ。

氏は茲に人類に於ける熟練の事を論じ、射手が能く百歩の外に目標を射又は劍客が驚くべき巧妙に達したとなどの例を引いて、

其如く巧妙なる熟練を得るに至りたるは、畢竟ずるに反覆經驗の結果、錯りては直し、錯りては直して、遂には習用の功、一種の運動感覺の作用となりたるものであつて、其奥妙の所に至りては實に口說くべからず、筆書すべからざるものがある。而して動物も熟練を得る樣になりたのは亦之と異なるものでない。卽ち反覆經驗の結果に過ぎないのである。只其異なる所は人にありては敎師の指南說明等の導きによること大なるに、動物には此事がない。動物が熟練を得る道を別ければ大略三つの仕方がある。卽ち第一、飢又は其他の感情作用を滿足せんとする心內の活動、第二、其親の敎導、第三、仲間の中に行はるゝ習慣の連續と、此三つである。此內第三の仕方は一般にはいへない、併し多くの動物は群をなして、一つの社會の如きものをなして生活するが、此仲間の中に生るゝときには其仲間のなすが儘に從ふものである。此動物の社會の如きものゝ內には、或る事をなすには或る格段なる方法を以てなすのである。然るに此仲間の內に生れたるものは、其先輩の仲間がなすと同樣の事を摸擬る傾きを有するものである。此によりても亦動物の熟練が得らるものである。

併し其熟練を得る樣になる根本的原動力ともいふべきものは、各動物一個一個の意識の支配の下に完成するものであつて、實に遺傳的天性である。而して此熟練を完成するのは視覺、聽覺、嗅覺等の相互の間の連關により、又運動感覺の連關によるものである。

動物が能く外界に適應して其生命を維持し、其種族を繁殖せしむるのは實に此熟練及び其應用によるのである。而して此熟練が應用をなす樣になるのは感覺經驗の種々の事情の下に生ずる所の聯想に基くのである。外界事情の千態萬狀なるに從て之に處する生存上の必要及び要求を充たす所の實際的のものは此應用である。賢こき動物は能く凡ての便利なる聯想を利用して經驗の發達を助

くる一要素とするのである(此事は後章に又論することあるべし)凡て此くの如き機敏なる順應は各種の經驗與料によりて實用上の目的の爲めに與料其物に相互間の關係を付する所感覺經驗の範圍内にあるものである。かくて動物は其生活の活動を維持し、複雜なる外圍の種々の障碍物に打ち勝ち行くのである。

以上は氏が動物の熟練に就て論じて居る大要である。卽ち氏は動物の熟練は其元は遺傳的性質に存して居るものとし、之れに外界の種々の事情に遭遇し、多くの經驗をなしたる結果として居るのである。是れ生物進化論者の唱ふる所と一致して居て、此熟練及び其の應用によりて巧みに外界に順應し、其生存を保ち、又其種屬の永續をなすものとするのである。

次に氏は動物の感官の鋭敏なることをいふて居る。之は誰でも知つて居る事實であつて、犬が能く兎の跡を嗅ぎ分け、又能く遠方を見ることなどは誰も知りて居ることである。而し同じく人類の内でも、野蠻人の感官は文明人の感官よりも鋭敏であることも學者の夙に認めて居る事實である。又氏は別段云ふてないが動物に於て著しきことは、動物が能く鼻、耳等の通常人類にては動かすことの出來ない感官を自由に動かし得る事實である。此等機官の比較、其發達及び進歩の有樣等を研究するのは、亦比較心理學に取りては頗る興味あることなるべしと思ふ。

第十一章　自動力と管理力

ハックスレーが「動物自動力」なる書を著はせし以來、生物に就きて學者間に自動機、自動力なる語を愛用するに至つたのである、抑も此等の語は如何なる意義であるか、先づ之を明らめて置く必要がある。其意義に就きてモルガン氏は前章に委しく說明して居るが、吾人は故らに前章には略して本章に紹介するのである。夫れは

一個の新機械あらんに、暫らく運轉した後には善く活動するものである、活動の完全に發達したるものには更に多くのものが存じて居る。若し之を疑ふ人あらば、乞ふ、犬に競爭すること又は室中に投じたる球を取ることを敎へて試みよ、必ずや犬が自身に經驗によりて得たる熟練は、曾に自動機に於て運轉の容易にな

つた如きのみでなく、運動機關の上に管理する巧妙の力あることを認めざるを得ないのであるされば之を「完全なる自動機」と名つくべくんば、吾人の所謂自動機とは、能く自ら經驗を利用し得るものに名くることを記憶せなくてはならぬ。「オートマトン」と「オートマチズム」とは其意義稍異なり、前者は自動機械のことであつて、後者は自動の力を有するの義である。而して予が動物を自動機と名つくるのは、意識を有する自動機といふ義である。本來の意義にては、或る動力を器械に加ふるときは一樣なる器械的活動をなすといふことを意義するのである。予は此意義にて人類及び動物を自動機と名くるのではないけれども、亦予は屢々此書に於て反射運動の機械的に一樣なる意義にても、此等の語を用ひて居ることもあり。即ち次章に於て恰かも孵化せる鷄鵝を小自動機と名つけたのは、其有機的機關によりて或る刺激に應じて反射運動をなすこと、恰かも巧みに構造せる器械の如しといふ義で用ひたのである。予は自動力を以て管理力に對せしめたのであるされば自動的活動は意識に伴はるゝこともあらんが、管理力は必然的に意識により導かるゝものである

此等の說明によりて本章標題の意義が頗る明了になつたことと思ふ以下本章中に更に委しく論じて居ることの大要を述べやう

外部よりの刺戟を受けたる結果として、之に應ずる反射運動をなすは神經中心內に或は之に依て起るのである。而して此作用を調和と名つく、此內外運動の調和は意識的管理力の伴ふことあり、又伴はざることもあり、此調和作用をなす根本的基礎とも名つくべきものは神經中心內にある遺傳せる有機的構造の物質である。此遺傳的構造あるが爲めに、刺戟に應ずる反射運動は僅かに生れたるのみにて頗る完全になすことあり。凡て高等哺乳動物にありては、乳を吸ひ、食物を嚥下する等の作用に於て、頗る複雜なる働きをば生れながらにして能く完全になし、依りて以て其生命を維持するものである。

鷄の鵝の場合に於ては、其歩み、啄み、跳ふ等生れながらにしてなす動作に就きて、雛は小自動機なるが如し、或は此等の動作を以て其祖先がなせる經驗の遺傳せ

るものとなす論者もあるが、經驗が遺傳するといふ說は確乎たる證據なく、又不必要なる說である。何となれば、其事實は更に容易に且つ簡單に解釋することが出來るからである。即ち吾人の採る說は動物の遺傳するものは、他にあらず、複雜なる活動を自動的にあすに適する樣に其構造のなれることである。

此等自動的動作の外は、如何なる小事にても凡て皆な始めは意識と伴ふものである。鷄雛又は他の動物が其幼時に於ては皆な意識の管理力を以て經驗をなすものである。

意識の管理力の根本的狀態は不快なるもの、及び不快と連關する活動を制し、快なるもの及び滿足なる結果を惹起す所の活動を意識的に奬勵するところである。

以上の論は之を要するに、動物が其動作をなす上に二樣の狀態がある、即ち一は動物が遺傳せる有機的構造により或る刺戟に對して自動的に働く動作と、一は意識を用ひ其支配の下になす動作と、二樣の動作を見るといふのである。他言を以て云へば、動作に先天的と後天的とがあるといふことである。是れ元より如何なる論者も異論なきことゝ思ふ。唯、問題となるべきは、何が先天的にして、何が後天的であるかといふことである。蓋し其區別は甚だ困難であつて、學者の經驗觀察の異なるにより、又其經驗せらるゝ動物の異なるにより、同じ動作を或る動者は先天的のものとなすもあり、或は後天的となすのである。而して之を決するには出來るだけ多くの實驗と多くの觀察を要することである

氏は次に生理學上より神經作用を論じ、自ら提起せる問題は

神經內に於て活動の自動的調和を司どる神經中心と管理力を司どる神經中心と區別ありや否や

といふにあるが、之に對して氏の說は

脊髓神經及下等の神經中心は自動的調和の活動をなす、此等の機關を通りて刺戟に影響せられたる激動は管理力の有機的機關をなす所の大腦に傳達す。而此管理力は『ヒラミダル、トラクト』の媒介により運動神經の中心に輸送せらる、云々。

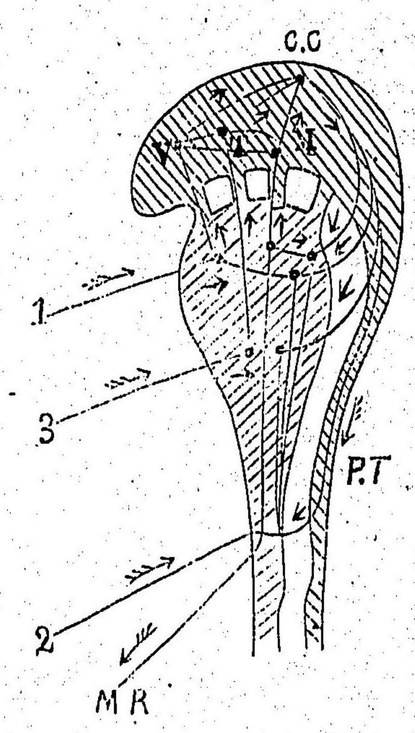
即ち氏は神經内に各感覺機關を司どる中心別々に存在し、大腦は凡て此等の小中心を支配する主宰の中心なることを認むるのである。此説の證明として生物解剖學上より多くの例を擧げて居る。

蛙の大腦を切り去りたるものは調和即ち外界の刺激に對して反射運動をなす力は依然存在す。即ち反射的自動力あることは變ることなきも、有意的動作あることを認めず。鳥類の大腦を去れば調和的動作も亦失ふ。哺乳類は直ちに死する

が故に精細に知る能はざるも、鳥類の如く兩者の動作を失ふやうである。

各、外感覺機關に應じてそれ〴〵獨立の神經中心あるか否かといふことに關しては、生理學者間にも議論のあることであるが、氏の如く獨立の中心を認むる方の説が、今日では勢力ある樣である。

反射運動及び神經中心の活動の作用に就きて、鷄雛が食物を撰ぶ順序を圖形を用ひて、氏は説明して居るが甚だ解し易き故に夫れを引用せんに、



(1)視覺の刺戟　(2)食を啄む刺戟　(3)味覺の刺戟(M.R)食を啄む反射運動、(V)視覺神經中心、(T)味覺神經中心、(M)運動知覺神經中心、(C.C)中樞管理力神經中心、(P.T)『ピラミダル、トラクト』、

始め眼によりて外物の刺戟を受け取り、(V)なる視覺神經中心に傳達し、更に(CC)なる主宰中心に達し、之より反射運動中心に下りて、茲に其外物を啄み、是れ亦前と同しく主宰中心に至り反射運動となりて之を味ひ、又味覺神經中心に感じ、前の順序を繰返す。此時管理力中心より流下する激動は彼の『ピラミダル、トラクト』を經て、或は調和的中心に下り、或は脊髓の反射運動中心に、或

は兩方に下るのである。(V)(M)(T)を結合せるは各神經中心が互に連關し居ることを示したのである。

吾人は前に神經の活動に二樣の方式あることをいつた。即ち或る動作は之を抑へ或る動作は之を奬勵することである。扨て此二樣の活動は神經內に如何にあるか曰く、

各神經中心は或は異なる神經纖維によるか、或は多分同一の神經纖維によりて二重の官能即ち或る動作を禁抑し、或る動作を奬勵する官能をなす。

意識の活動は如何にして起るか。之に對する氏の解釋は全く唯物論的である。氏曰く、

予は意識とは大腦中に起る所の分子的震動に聯關するものとする說を採用するものである。次に予は吾人々類及び高等動物(哺乳類)にありては、意識は大腦の官能的活動なりといふことを假定する。されば又雖が食を啄む如き場合には、四ツの神經中心即ち視覺、味覺、運動知覺、管理の四神經中心が同時に分子的震動の

狀態をなし、凡て互に相連關するものである。

次に氏は管理力即ち主宰神經中心の作用を詳論して次の如く論して居る。

管理力は二重の區域を有す。即ち下等の反射區と高等なる管理區とである。各生物の生涯に於て、特に其幼時に於て前者下等の反射作用は奬勵せられ、且つ管理作用によりて更に補はれ、かくて其作用は益々活動する樣になる。而して其抑へらるゝ活動は用ひざるが爲めに反對作用たる性を失ひ、消失する傾きを有す。又適宜に制限せらるゝものにありては、或る活動は奬勵せられ、或る活動は抑制せらる。かくて程よき形となる。是れ皆な管理力によりて以上の如くせらるゝのである。既に此反射作用が意識の管理力によりて適當なる形を取るに至れば、茲に管理力は其活動を止め、反射作用自身にて能く其適宜の活動をなす樣になる。以上の如くして習慣を生し、反對運動と稱する外界の刺戟に對して順應する作用確立するのである。

管理力の性質は知覺神經中心に於ける情調により決せらるゝものである。

第十二章　本能と智慧

凡て生物は肉體的に種々の事をなし、精神的に樣々の事をなす。是れ何によりてなすか。生來の經驗は元より此等の事をなさしむる樣になりたることあらん。併し經驗によりて知識を得、外界の事物を知り、身體を動かし、又外界に順應せしむる樣になるには、無生物と異なる所の能力、無生物になき所の活動を有せなくてはならない。即ち經驗をなすといふ語は既に始めて生れたる時より一種特別の活動を有して居るといふことを豫定せるものである。金石は經驗を積むことは出來ない。經驗をなし得べき所の能力が生物には本來に具はつて居なくてはならぬ。此本來の能力により之に經驗を加へて、次第に外界を知り、之に順應する所以を知り、更に進んで人類に至りて反省力といふ高尚なる能力、復雜なる活動を有する樣になるのである。然らば其本來の性質は何處より得たるものであるか。或は之を神より賦與せられたるものとするものもあらん。然れども是れ科學の許さゞる所である。科學は

不可思議的神秘的説明を拒否するものである。分らぬ所は分らぬことゝして其儘にして置いて、後世の學者を待ち合理的に説明し得る限りを以て滿足するものである。扨て此本來の能力は何處より來りたるか、今日にては之を遺傳に歸するのである。然らば其本能即ち本來の能力は千古を貫きて一樣であるか、科學的にいへば其分量と性質と樣式とに於て不變であるかといふに、否な單純より複雜に進みたるものである。されば犬の本能と人類の本能とは元より異なるのである。種類に於て異なるにはあらで、程度に於て異なるのである。而して凡ての生物は此本能の上に經驗をなして、外界を知る樣になる。智慧は經驗の結果である。然らば其本能即ち先天的能力と智慧即ち後天的能力との差別は何處にあるか、換言すれば、何處までが本能であり、何處からが智慧であるか、又凡て智慧は後天的に得たものであり、先天的にはなきものであるか。此等の問題に就きて明かにせんが爲めにモルガン氏は氏自身の實驗より得たる鷄の雛に就きての實例を引用てし居る。

今特に智慧といふて知識といはざるは、知識とは系統的排列をなせるものに名つ

け、智慧といふは廣き意味にて何事によらず、又切れ〳〵にても或ることを知りたる其作用に名くるからである。

鷄の雛が食物を拾ふ場合に於て、始めは嘴の端が正しく其食物に接することが出來ない、一個の食物を拾ふに、數回失錯して漸く之を啄むのである。又水を見るも之を飲むべきものと知らない、予は扁平の皿に水を充たして、雛の群れの前に置きたるも、彼等は更に注意せずして、水を渉りて走り歩き、之を飲まんとすることがなかつた、偶一羽の雛が水中に立つて居て、其趾を搔く際、雛はよくかゝる事をなす、圖らず嘴を水中に入れて、茲に始めて水を飲み始めた、嘴が濕氣を感じた爲めに飲むことを學び得たのである。

氏は此例に於て飲食といふ如き生存上必須の作用は遺傳によりて得たものであるが、食ひ得べきもの、又飲むべきもの等は經驗にて得たものとするのである。即ち生存上根本的作用は本能より來りたるものなれども、外界の事物に就きての智慧は遺傳によりて得たるものでなく、全く各自の經驗により、後天的に得たものであるとするのである。氏は茲にスパルディング氏が七面鳥の雛が鷹の叫聲を聞きて本能的恐怖を示したといふことの例を出せるを引用して批評して居る。蓋しスパルディング氏は七面鳥の雛が能く鷹の音を本能的に聞き分けた樣に書いてあるのに反對して居るのである。雛が恐怖の念を本能的に有して居ることは事實である。併し其能く鷹の聲として恐れたといふことには同意することが出來ないといふのである。氏の實驗上鷄の雛の生れて二日經たるものに猫を見せたるも、更に恐怖の徴候を示さなかつたといふので、其自説を慥めて居る。氏は其他多くの例を引用して、雛が外界の事物に就きては少しも遺傳的智慧を有して居ないといふことを證明して居る。

果して然らば嚴密に本能及び智慧を定義すれば如何、氏は

本能的活動とは一の變態なき更に不平等なきものにして、從ひて智慧の管理及び案内により各自の熟練を修得する上には、何等の必要なきものである。

智慧は不完全なる本能を助けて完全ならしむるものである。若し之なきときは

如何に活動を反覆するも、本能は決して完全にせられざるものである。と定義して居る、然れども是れ定義としては餘りに消極的にして、寧ろ説明といふ方適當なる樣に思はれる。

此本能の活動するとき意識は如何なる狀態にあるか。氏は之に答へて

本能の働くときには、意識が伴ふて起ることがあり、又伴はないことがある。而して意識の伴ふときでも、主として之が働くことなく、唯隨伴現象として、見物者として存ずるのみであつて、何等の導きをなすこともなく、又何等の管理をなすこともなきのである。若し一たび經驗より得た所の智慧から導かれ、管理せらる場合には、既に本能的活動ではない。

鷄雛、鴛雛等にありては、何物が本能であるかを知るは、高等動物に於て何が本能なるかを知るよりも容易である、是れ高等の生物にては、或は其親の敎導あり、或は其一群の仲間中の敎導あり、或は他の仲間の爲すことに摸擬するなどあるからである。抑も生物は或る刺戟に應じて反射運動をなす。而して其反射運動は或は甚だ適當にして細密なることあり、此場合には是れを本能的活動と名づけ、若し其反射運動中に不適當、不細密なるものが澤山ある中より、適當にして細密なるものを撰ふ力あるときは、其力は是れ智慧の初級のものである、而して其本能卽ち遺傳したる活動に就きて鷄の雛と嬰兒とは元より異點が甚だ多い。又其敎養を蒙る點に就きて其樣式に就きて之より亦甚だ異なるは無論なれど、其に意識が次第に發達して自己の經驗により自己の智慧を得ざるべからざる點は相一致して居る所である云々。

以上は氏が本能と智慧の區別に就きて、又其活動の仕方に就きて論せる大要であつて、吾人は別に異論なきものである。次に氏は鷄の雛が漸く長ずるに及びては或る物は喜びて之を食ひ、或る物は始め二三回は啄むことあるも、遂て全く顧みざる樣になる例を明快に叙述し、其他更に又高等なる智慧を鷄の雛が次第に顯はす樣になることを氏自身の實驗によりて説明して居るが、結局次の數條に結論して居る。

食ひ得べき虫と食ふに堪へざる虫との間に差異を認むること、數回の經驗にて此區別を知得すること、次に虫の外見によりて、虫の異類なることを知ること、厭ふべき味と喜ぶべき味とを其虫の外見により連想して區別すること、此等經驗の導きに從ひて爾來食を撰ぶ樣になること。

而して此等は皆な經驗によりて得たる智慧の結果であるとして居る。

第十三章　關係の知覺

智識とは何ぞや、關係を知ることなり、原因、結果といひ、本体、屬性といひ、皆な一種の關係である故に吾人の知識は實に絶對的のものでないのである。右ありて左あり前ありて後あり、時間といひ、空間といふ、又一種の關係であるといふても宜しい、吾人が絶對的といふものも相對に對する絶對であつて、眞の絶對といふものは吾人か考ふること出來ないのである。されば吾人の知識は實に關係を知ることである物質界の關係を研究するものは物理學でありて、天体の關係を知るのは天文學で、

あるモルガン氏は本章には關係の知覺は如何にして生ずるかを論じて居る。

聯想の生ずるは事物相互の關係を識別するより來る。又數多の事物を見て遠近を識別するは、空間の關係を知覺したる結果である。然らば空間の關係とは如何なるものをいふか、又如何にして生ずるか、心理學の方面より論ずれば次の如くである。

吾人は常て意識狀態は連續せる現象なることを論じた。今之を記號を以て示せば、

甲—乙—丙—丁—戊—‥‥‥

といふが如く、連續せる作用である。而して吾人の意識が甲より次第に移動して丙となり、丁となり、更に進みて間斷なく連續する間に於て、其移動に對する意識は甚た不明了であつて、所謂傍邊的狀態にあるものである。然るに若し此移動に對して注意を向け、傍邊的狀態にあるものを焦點的狀態になすときは、換言すれば、其連續せる移動を知覺するときは、茲に始めて關係といふことを知るのであ

る而して關係の最も普通なるものは類似及び差異の關係である。此關係を知覺するは、其故に反省の結果である。過去に起りたる意識的狀態を反省して得るものである。孩兒にありては反省作用がなき故に、關係を意識することが出來ない然り、明了に關係を意識することは出來ない、併し又此意識的狀態の移動に對する汎衡たる意識即ち從屬意識的覺知を有するものである。

數多事物間の關係や其他の關係は甚だしく復雜なるものである。其關係は如何に復雜であつても之を知覺する上には、其復雜なる關係を一時に知覺するものでなく、始めは其多くの關係の中、或る一つの簡單なる關係を知覺し、それより次第に進んで遂に其復雜なる關係を知覺するのである。

又生理學上の立脚點より空間の關係を知覺するに至るは、運動神經の作用である始め印象と印象との間の關係を知るるには、吾人の感覺機關、特に視官の運動(視覺機關の筋肉運動神經)が必ず伴ふのである。其運動の如何によりて或物は之を同樣となし、或る物は之を異樣となし、茲に關係を知覺するのである。

若し又此關係を物理學上より論すれば、其印象といひ、關係の知覺といひ、畢竟するに外界實在の表現である。外界に物質があつて、其印象を得、外界に關係が存して、其關係を知覺するのである

	1.	2.
傍邊的狀態	.c	
燒點的狀態	.a	.d
傍邊的狀態		.e

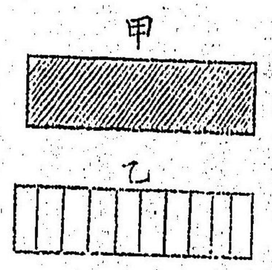
以上は空間の關係の知覺に就きて論ぜる大要である。氏は次に時間の關係を知覺する所以を論じて、是れ亦空間の知覺と同じく、反省の結果であるといふて居る。然らば、空間の關係と時間の關係とは如何なる點に於て異なるか、氏を圖式を用ひて說明して居る。

意識作用が左より右に進み行くとし、第一の意識に於てはaが燒點的狀態にして、cを其傍邊的とし、次の瞬時の意識狀態にありてはdが燒點的にしてeが傍邊的として、空間的關係を知覺するのはcn若しくはdeと竪に反省するのである。時間的關係を知覺するのはedeと竪にも横にも反省するより起るのである、

次に數の關係知覺に就きて以爲らく、

數の關係知覺をなすべき材料は空間、時間の關係に於けるが如く、吾人日常の經驗内に續々起り來るのである、而して此數の關係を燒點的になす前に、卽ち知覺するに先ちて、既に久しく傍邊的狀態として存在するのである。兒童が能く數を計算し得る前に、既に二と三、三と四、四と五等の間に差あることを認むるのである。犬の敏捷なるものも亦能く紙牌に一より十迄書きたるものを見分ることがある。然れども犬が之を見分るのは感覺の印象にて區別するのである。又連續せるものを見分る場合に於ても、人は誰にても三つの等しきものが連續せるものと四つの連續より成れるものとは直ちに別段計算を用ひずとも見分ることを出來るのである。併し數の關係を知覺するのは此感覺印象の如何によりて區別するものとは大に其趣を異にするものである。扨て此數の關係を知覺する樣になつたのは多くの數のものが一時に顯はれたるものより來るか、或は連續して多くのものが起るのを經驗して得たるものなるかは、明言することを出來ないので

ある。併し時間の關係を知覺する場合の如く、等しきもの〻連續より生じたとする方が寧ろ適當なる樣に思ふ



甲圖を左より右に見るときに生ずる印象は同じものが永續するのを從屬意識的に知るに過ぎないが、乙圖を左より右に見るときには、相類似せる印象の連續する族類を知覺するのである。而して此類に於て時間といふ關係を知覺するのみでなく、又數といふ關係も知覺するのである

次に又同類及び異類の關係知覺の起原に就きて論せる所は、茲に紹介する價値あることゝ思ふ。

同類或は異類の關係に就きて心理學上より論ずるときは、同類といふことは連續して生ずる所の印象が或點に於て同一なりといふことか、或は其印象の連續が或る物より之と同樣なる印象に移遷するといふことを反省によりて認識することである。而して異類とは一つの印象が次に起る所の印象とは異なりて居

るか、或は或る一つの印象より之に類せざるものに移遷するといふことを知覺するのである。故に同類若しくは異類を知覺する場合に於ては、必ず此移遷といふことがなければをらぬ。若し此く甲より乙に移遷し、連續することなきときには、吾人は二つの印象の類似をいふと能はず、唯々單純なる印象の永續せりといふことを得るに過ぎないのである。而して如何なる場合にありても、確乎と同類なることを知覺するには、同類其事の關係を意識的に燒點的に理解することにあつて、今起る所の印象は常て一たび起りたるものなりと從屬的狀態に知覺するものとは大に異なるものである。

此關係知覺は人の實際生活上に如何なる影響を與ふるものであるかを論じて次の如く言ふて居る。

若し既に一たび空間、時間、數、大さ等の關係を知覺する樣になれば、聯想作用によりて再現的知覺を喚起するものである此時には必ずしも燒點的狀態となるといふにも限らざれど、從屬意識狀態として心內の根底を形成するものである。

即ち關係知覺生ずるときは、此が從屬意識狀態として常に精神中にあつて其相關係せる印象の內で一つの觀念となりて起るときは、他の印象は聯想作用によりて直ちに再現する樣になるといふのである。

次に比較心理學上より成人と動物及び兒童の差異を論じて

動物及び兒童は關係其物を知覺することなく、唯々汎然感覺せる關係を根底として有する所の印象及び觀念界に生活するのみなるも、既に十分發達せる人にありては、常て意識的に捕捉したりし關係其物を根底とせる知覺界にも生活するものである。

本章の結論として關係知覺の起る樣式卽ち順序を論じて居るが、其大要に曰く、

關係知覺の根本的樣式を進化論の立脚點より論定するは、實に困難の業である。されば吾人の此に論ずる所を以て凡ての點に於て正當確實なりと主張するのではない。併し今之をいはゞ吾人の日常生活の最も單純なる生活に於て先づ起るものは、空間の關係及び時間の關係ともいふべきものと思ふ。此二種の關係知

覺あつて之より大さ卽ち空間を占むる廣がりの關係、連續、卽ち時間を占むる廣がりの關係、數の關係、軌範的聯想の關係、色、光明等の視覺に關する關係、音聲に於て音色、音調等の關係、味に付て甘苦等の關係等及び以上の凡てに通じて類似或は非類似の關係を知覺する樣になるものと思はる。

結論として吾人が注意し、留かざるべからざることがある。それは吾人が知覺する所の關係は凡ての場合に於て皆な特稱的の關係だといふことである然れども此ことは其關係を付せらるゝ與料までが特稱的だといふことではない、特稱的といふのは唯々關係に就きていふことにて、其與料は時に或は概念的思想より生ずることもあるものなれば、特稱的だといふのではない。

畢竟するに、氏は關係知覺に於て二種に分ちて居る。卽ち一は明了に關係其物を意識する知覺と、一は汎然と知覺するものとである。而して前者の關係知覺は反省作用によりて起り、後者は感覺經驗より生ずるものとして、動物及び兒童には此反省力がなき故に、未だ前者の關係知覺はなきものとして居るのである。

第十四章　動物能く關係を知覺するか

動物の生存上、又其外界に順應する仕方に於て、關係の知覺といふことは更に何等の實用あることを證明すること能はず、既に何等の實用なきものとすれば、關係の知覺は動物の心中に發達せりとなす論據を見出す能はず、

といふのが本章の主眼である。卽ち氏は關係知覺は人類に特に有するものであつて、動物にはなきものとするのである。此論は全く目的論的である。卽ち人類は何の爲めに關係を知覺するか。曰く、人類の生活上關係を知覺する必要がある、動物の生存には關係知覺の必要がない、故に彼等には關係知覺なしとするのである。然らば人類の生活と動物の生活と如何なる點に於て相違あるか、人類の生活は何が故に關係知覺を必要とするか、動物の生活は何故に關係知覺の必要なきか。是れ論究せざるべからざる順序である。

關係知覺は記述的交通の進化に於て必要なる要素である。抑も動物も亦人類の

如く其仲間をなして生存するものが多い。既に仲間をなして生存すれば、其間に交通といふことがなければならない。即ち何かを以て各自の思想を交通することが必要である。然るに進化論上此交通に二つの階段がある。即ち表示的交通と記述的交通とである。動物は既に交通をなすものであるけれども、未だ記述的交通をなすに至らないものである。記述的交通は人類に限るものである。動物と雖も或は身振りにより、或は或る音聲を以て其仲間の間に一種の交通をなすことは事實である。然かも彼等の交通は表示的交通であつて、未だ記述交通をなすまでに發達せざるものである。其表示的交通をなす間にありては、關係知覺の必要なきものである。

氏の記述的交通とは言語の交通を意味するのである。言語の多くは抽象的であつて、抽象の關係を知覺した上でなければ出來ない。然らば言語の交通と關係の知覺と何れが先きに起るべきものであるか此邊に就きては氏は何も論じてないのである。或は動物にも言語を用ふるものがあると主張する人もある、果して動物が言語を用ひて、其思想を發表するものであるか否かは、實に動物其物でなければ知ることの出來ないことである、併し吾人の知り得る限りに於ては、動物には言語を使用するものあるといふ論據を見出すことが出來ないのである。若し果して動物が言語を使用するものとすれば、彼等も亦關係を知覺するものとせざるべからざるも、彼等が言語を使用せずとすれば、關係を知覺せずとするは尤もなることである。

次に氏は更に動物の表示的交通のことを論じて居る。

表示的交通の最初の階段は純粋の感情的のものである、犬其他の家畜の動物にありては、人が彼等に云ひかくる異なる言語に對して、之に應ずる種々の返答をなすは事實である。されば彼等は異なる言聲に對しては、夫々異なる觀念の連合を有するものゝ如くである。

例へば犬に對に對し、愛して云ひ掛くる時に犬が之に對する舉動と、人が怒りて叱するときに犬が之に對する舉動とは全く別である。其他多くの點に於て恰かも犬が人語を解するものゝ如きことあるは、畢竟するに異なる音聲に對しては

異なる觀念を有するからである。

通例俗人が動物が人語を解するものゝ如く考ふるは誤つて居る。蓋し左樣に考ふるものは動物も人類と同じく精神作用を有するものと豫定して考ふるからである。又動物には記述的交通をなす如き事實がある樣に思はるるが、凡て他の更に下等なる心理現象を以て説明することが出來て、矢張り表示的交通の結果としか考ふることが出來ないのである。氏は次に其友人ロバート、ボトル、ワルレン氏の報告なりとて、犬が其朋友の爲めに其力して仇を復した例を出して居る。而してこれも未だ記述的交通の證となすに足らざることを論じて居る。

表示的交通より記述的交通に移るは如何なる時代にあるか。之に對して氏は以爲らく、

其變遷時代は明示する能はざるものである。然れども此時代に於ては印象を云ひ表はす音聲或は他の符號的記標の外に、關係をいひ表はす音聲及び他の記號を用ふる樣になつて、始めて記述的交通をなす時代になるのである。

されば關係を云ひ表はす音聲等を用ふるに至る前に、先つ關係其物を知覺しなくてはならぬ。前既に動物は關係を知覺せざるものとなしたれば、其記述的交通をなさざるは明かなことなのである。或は曰く、動物も能く事物の遠近を知覺するは距離といふ關係を知覺する故にあらずやと。氏は之に答へて曰く、

然り動物も亦能く遠近を知覺するものゝ如し。然れども彼等動物が遠近の事物に對して適當に動作するは、其事物に對する反動の結果である。無意識的自動機として外界の刺激に應ずる反動より然るものである。彼等は到底人類の如く空間といふ關係内に距離といふことを知覺することの出來ないものである。

結局動物が事物に就きて知るのは外感覺經驗の力によるのである。

氏は動物が外界に順應して動作するのを無意識的、自動機的、反動といふ。されば外界に對しては全く受動的である。吾人は勿論動物の精神作用は吾人々類と同等だとするものではない。併し氏の如く全く受動的のものゝ如くに見るのは、採らざる所である。彼等にも幾分かは統一作用が其意識中に存在することを許さんとする

ものである。氏の説は何方かといふと、動物の精神作用を殆んど機械的に説明せんとするものである。吾人は精神作用には物質的現象と全く異なる所あつて、到底之を物質の法則を以ては解釋すべからざるものあることを認むるものである。

第十五章　概念的思想

關係を知覺するとは、二つ以上の事物に就きて比較して、類似或は差違、前起或は後起、原因或は結果等の其等事物間に存することを知覺するのである。既に比較せざるべからざるものなる故に、比較せらるべき事物は意識内になくてはならぬ。一は意識して居るも、他は忘失せりといふものにては比較することが出來ない。されは氏は

關係を知覺するには印象が意識の傍邊より未だ消失せざるだけ近時のものならざるべからず。

といふて居る。是れ多くの場合にては然らん。前に見たるものと後に見るものと、未だ全く意識より脱出せずして存在する間でなくては、其間の關係を見出すこと出來ないのである。然るに氏の所謂傍邊的意識といふのは大凡幾許の時間繼續するものであるか明確にいふてないのである。氏は第六章に於て記憶に就きて論じて居るときにいふたことがある。卽ち吾人の意識現象は直ちに消失して恰かも薔薇の花の一度開きたるものゝ如く、又五分時以前に發した吾人の音聲の如く、消失して跡なきものであると、若し果して吾人の意識現象はさるものであるとすれば、傍邊的狀態となりて存在する時間は甚た短かくなけらねばならぬ。昨日經驗した事物と今日經驗する事物とを比較する場合には、昨日の印象が傍邊的狀態となりて今日迄持續せりといふことは、氏の論よりは云ふことが出來ないのである。然かも猶昨日の印象を今日迄持續せりといふならば(假令ひ傍邊的にもせよ)、是非共觀念の把住力といふことを意識作用に許さねはならぬ。然るに氏は觀念の把住力を第六章に於て拒否して、五分以前に發した音聲と同じく印象及ひ觀念は消失するものとすれは、昨日の印象と今日の印象とを比較する場合に於ては昨日の印象を今

日再び新たに意識中に起さねばならぬ。即ち記憶によりて昨日の印象を今日觀念として再現せしめなくてはならぬのである。記憶に就きても氏の考には異論あるがろれは別事として關係知覺の條件として氏のいふ所計りでは不足であると思ふ。即ち吾人は『關係を知覺するには、過去の經驗に注意を向けて再現せしめ、之と今得る所の印象とを比較』するといふことも必要である。換言すれは今經驗する所のものと過去の經驗を記憶より呼び起して比較するより關係を知覺することありといふを加へんと欲するのである。

抑も印象は具體的である。特稱的である。個體的である。然るに一たび或る關係を事物の間に認むる樣になつては、總合的である。個體的である。個體的でない。然るに始めて知覺する關係は甚だ簡單なるものである。之が如何になるか。

實際經驗に於て一たび關係を知覺するときは。此關係は更に高等なる精神作用の材料となる。此材料によりて遂に概念の構成力に到達するのである。概念となりたるものは具體的、特稱的、個體的の性を失ひ、抽象的、普遍的、全稱的應用を有するものである。

概念を得るは、夥多の經驗上に關係の永久不變なることを反省したる後に、始めて生じ得べきものである。

然り、單に甲と乙との關係をいふときは、其關係は特殊の關係である。概念は更に進みて普遍の關係を見出し、或る一群の印象中より夫等に共通の點を見出したる上に始めて構成せらるものである。されば氏は

同樣なる關係なりと知覺するは、特殊の關係を知覺するに過ぎない。此特稱的性質を失ひ、凡ての特殊の事物に共通なる關係其物を意識の燒點的狀態になすときに於て、始めて概念構成力に到達するのである。

次に氏は如何にして概念が構成せらるゝかを論じて、

概念構成力は抽象作用と分解作用との結果せるものとした。是れ多くの心理學者の一致する點にして、概念を作るには、始め一々の經驗にて得たる印象を分析して類似の點を抽象し、茲に概念を構成するのである。例へ

ば黑き馬白き馬、甲の馬、乙の馬を見其中より共通なる點を抽象して甲にもあらず乙にもあらざる馬といふ概念を構成するのである。而して抽象する作用は分析作用を豫定するものである。共通の點を抽象するには先つ一々の印象に就きて分析しなくてはならぬのである。氏は又事物の性質は概念の一種として居る。又動物には事物と其性質の差別なきものであつて、唯燒點的印象と從屬的意識觀念との差あるのみとして居る。分析作用及び抽象唯作用は意識の高等なる活動であつて、動物には其形跡を見出すこと出來ないものである。されば動物がなす一々の經驗に於ては、唯々經驗あるのみであつて、或る事物を分析して事物の性質を事物其物より分析すること出來ないものである。氏はかゝる分析作用のあるのは反省作用の生じた後として居る。氏曰く、

反省は曾に個々の經驗の材料を取扱ふのみならず、又之を廣き範圍に排列し、分解して、其內の燒點的要素を抽象し、其總合の結果概念となる。此時始めて事物其物を分析して吾人の思想中に性質を事物より分離せしむるのである。

次に此概念作用生じて記述的交通始めて完全になるべきをいふて居る。蓋し此概念ありて言語が完全になるのである。而して同じ語にても人により其意味が異なるは、其人の過去の經驗の如何による。同じく球といふも兒童の考ふる所の球と成人の考ふる所の球とは其內容に於て大に異なる所がある。

次に氏は吾人か概念を搆成するは、自然界の不變なることを假定した上のことなるを論じて、次の如く言ふて居る。

凡て吾人の思想及び論理的言顯しは結局經驗に其根據を置くものである。而して經驗の結果自然界の不變といふことを思想の條件とするのである。(即ち信用するに足るものと經驗を考へる)。實に吾人が特殊の一々の知覺より普通性の概念を搆成する樣になるのは、自然界の不變一樣なるものといふ假定の上に始めて出來得るものである。若し經驗にして信用するに足らざるものとせば、概念も何等の功なきものである。されば自然界の不變一樣であるといふ信用は(之を意識し居るも又無意識的にあるも)自然界に於ける活動の凡ての說明及び解釋の

條件なるのみならず、又精神的發達の條件である。人類及び動物に於ける知的活動の全範圍は自然界の不變一樣といふことの條件を要するものである。然れども愈々總括の度を廣めて、遂には全自然界を整然として一樣不變なるものとなすに至るは次第に順を逐ひ、徐々に得べきものである。既に此終局の概念を攝成するに至りては、理性は其茲に達したる階段を顧みて、理性か此終局の概念に達した所以を了解するに至るのである。

吾人の知識は實に經驗より生ずるのである。吾人は古代の多くの哲學者の如く理性又は直覺によりてのみ知識を得るものとは考へぬ。然れども亦知識は全く經驗より生ずるものといふ考でもない。勿論吾人の知識は經驗によりて開展せらるゝには相違なきも、經驗以外に精神作用に於て特殊の作用あることを認むるものである。之が卽ち一々の經驗を統一する作用である。此作用なきときは幾百回の經驗を積むも、決して知識となることの出來ざるものである。又其經驗する事物に就きても、一々別々なるものにては、卽ち一々の事物が全く獨立して全く何等の關係なきものなるときは、又概念を攝成することは出來ない。從つて知識を獲得することは出來ないされは主觀的には人格の統一を要し、客觀的には自然界の事物の一樣不變なるを要するのである。

第十六章　動物能く推理するか

此問題は推理といふ語の解釋の如何によりて決すべきものである。若し動物が其經驗を利用して外界の種々複雜なる事物に順應することをも此語の內に含ましむるときは、吾人は勿論然りと答ふるに躊躇しないのである。然れども若し此語を通常の意味にて、卽ち合理的生物卽ち人類のなす如き推理、言ひ換ゆれは『其故に云々』といふ意味に用ふるものとせば、容易には首肯することの出來ないのである。予は今は此語を通常の意義にて、卽ち狹き意義にて、用ふるのである。故に此問題は他語を以て云へば、動物は能く『其故に云々』といふことを意識の燒點的狀態になし得るか否か、又動物は能く何故に云々といふことを考へ得るか否

かといふ問題になるのである。

以上に論する所を以て推理といふ語は如何なる意義にて氏が用ひて居るか、又本章に論する內容は如何なるものなるかを豫想することが出來ることゝ思ふ。茲に氏は其獵犬が外出せんと欲するも門を鎖しあるときには其頭を以て門の掛鐵を扛げて之を開くことを記載し、之に就きて論じて居る。

此場合に於て、明確なる論理的形式ではなきやも知らざれども、或る度に於て漠然たる實用的の仕方に於て、次の如き觀念の連鎖が犬の精神中に起る樣にも考へらるゝことがある。卽ち何故に門が閉ぢて居るか、掛鐵が之を閉づるのである。我之を扛げん、今掛鐵を擧げたれば門を保つものなし、夫故に門開くと考へて居るやうである。然れども如何程疎雜なる有樣にてなりとも、『何故に』又『夫故に』を含む所の觀念を犬が有したりしと假定せざるべからざる必要が何處にあるか。感覺經驗の單純なる指導によつて犬が動作すといふ說を以て此事實は說明すべからざるか。

是れ實に氏が動物心理學の研究の唯一法規たる所の『物動の活動』にして下等なる心理的活動の結果として解釋し得るものは、決して之を高等なる心理的現象の活動を以て解釋すべからず』といふ前提より、是非共來らねばならぬ所の論である。而して上の犬が門の掛鐵を扛げたる場合に於て、犬が果して上述の如き推論より其動作をなしたるものといふも、又單に感覺經驗の指導によるといふも、兩者の爭は何處まで論じても、決することの出來ざるものである。故に此問題を決せんと欲せば、犬が此動作をなす樣になつた始めよりの狀態を研究せなければならぬ。而して氏が此犬に就きて經驗したといふ大要を記さば、次の如くである。

門は鐵製にて、鎖掛を扛ぐれば門の重さにて自ら開く樣になつて居るのである。而して掛鐵は地より數吋の高さにあるのである。或る時或る外誘の爲めに此犬頻りに門外に出でんとして、墻の彼方此方を駈け廻りて其頭を以て廐門の下部を何處を問はず壓し試み居たるに、漸く數分時の後彼が偶然其頭を鐵の下部に置いた。是れ掛金の下部は地を隔るゝこと數吋にして、犬が其頭を入るるには恰好

の隙あるのである。掛金は之が爲めに扛がりたるに、犬は急に其頭を退け、諸方を見廻はし、而して門の開きたるを見て驅け出てた。其後もが此犬を連れて外出するときには、故らに門を閉ぢて犬か之を開くまで放棄して、更に助力せざりき、然るに其後も數回となく前の樣にして、漸く掛金を扛げた。其始めて目擊せしときより殆んど三週間にして、始めて過またず直に其頭を掛金の下に置きて、之を扛ぐる樣になつたのである。

之に對する氏の斷案は犬が此く門を開くに至りたる全歴史を知らば、其動作たる全く感覺經驗より生じたるものなること明了なるべしといふのである。

氏は又生物の進化論上より動物には『何故に』『何なるか』といふ觀念なきことを論じて居る。曰く、

予は前章に動物間には記述的交通の能力ある證跡なしといふ予の意見を述べた。既に記述的交通なきものに説明的交通のなきは勿論のことである。『如何にして』『又は』『何なるか』といふ問及び之に對する答は記述的交通時代の符號と考へらるべきものである。而して『何故に』いふ問及び之に對する答は、説明的交通時代の記號と考ふべきものである。或は云はん『如何にして』『又は』『何なるか』といふ問は必ずしも物に記號を付することなくも、動物の精神中に疎雜なる形式にて存在し得ると。然れども予は之を有り得べきことと考ふることが出來ない。若し人あり『如何にして』或る事は成さるゝか』『又』『何物で或る事があるか』を自分に問ふとすれば、其人は自分で自分と交通するのである。而してかゝる交通は關係なるものを知覺せんとする願望より得らるべきもので、既に感覺經驗時代を經過したるものである。汎然未だ一定の形をなさゞる驚駭より來る所の『何ならん』或は『如何にせん』といふ如きは明確なる疑問とは異なるが。而かも猶は此を融解するには關係知覺力の蓋然を豫定するものである。

即ち氏は『如何にして』『又は』『何なるか』なといふ考は到底動物には見出すことの出來ないものとするのである。又『何か』といふ思想は記述的交通期に於て始めて生ずるものとして、兒童の例を引て論じて居る。

『何か』といふ思想は知覺力の時代及び記述的交通期を豫定すべきものなることは、次のことにて明了であらう。卽ち若し幼兒にありて未だ經驗せざる或る事物に就きて『是れは何』と問ふときに於ては、之に對して單に其物の名を敎ふるのみにては滿足しないで、更に『それは何か』と問ふであらう。此時幼兒を滿足せしむべき答は唯、其過去に經驗したるものに就きて記述するより外はないのである。かく『何か』といふ思想は記述的解答を含むのである。然るに此記述的交通期は關係の知覺なくては不可能のことである。而して予は動物の心の內に『何か』といふものに同樣なる或る心理的現象あることの十分なる證據を見出すことが出來ないと。況んや『何故』といふことは說明的交通期にあるものに到底望むことは出來ないのである。

氏が本章の結論は次の如くである。

凡て動物の動作は感覺經驗の結果及び聯想作用にて說明することの出來ないのは稀である。併し後來實驗的研究の功を積まば、或は動物にも高等なる心理的現象を發見することあるやも知れず。予は又獨斷的に動物には推理力なしと主張するものにあらず。併し是迄得たる經驗によれば、吾人が用ひたる狹き意義にては彼等動物が推理をなすといふことよりも、智能の演習の結果なりとする方適當なる樣に思ふ。故に予は茲に動物は推理せぬといふことが蓋然なることは予の意見として發表するものである。

第十七章　主觀及び客觀

本章に於て論せる所は小序に於て論じた所と略、類して居る。卽ち一言にて本章の主旨を蔽へば、主觀及び客觀の區別は思想の反省力によりて始めて生ずるものであるといふのである。而して動物には未だ此反省作用が發達し居らざるが故に、此區別なしといふに過ぎない。今少しく細かに本章の內容に入らば、

主觀客觀の關係を知るに至るは、感覺經驗の結果として生じたる印象を考ふることによりて始めて生ずるものとすること最も便利である。今假りに小犬が獸

の骨の印象を有することを考ふるに、其獸骨を啗み居る小犬に取りては、客觀主觀の差別あることなく、唯一個の實在的に明亮なる經驗の印象あるのみである然れども此小犬が有する印象を説明せんと欲する吾人には、唯一個の經驗として考へずして分析するのである。卽ち吾人の概念界に於て此經驗を兩極に分つのである。而して一方の極には客觀の獸骨あり、他の一方には其小犬の主觀的意識あるものとするのである。

次に此事は小犬の如き動物のみでなく、我々人類にありても一樣なることを論じて、

吾人々類にありても亦同樣である。吾人の經驗中には主觀、客觀の兩者を含有するものであつて、吾人が薔薇に就きて經驗するときに、其色と香とに對する感覺が吾人の經驗中には分つことの出來ないと同樣である。色と香とを分つは思想內にてなす働きである。日常吾人は實に色と香とを分つも、其感覺經驗內にありては更に分つべからざるものである。之と同じく印象を得る上に主觀的意識作用と客觀的外界の實在とに分つも、印象其物の內にありては分つべからざるものである。其主觀となし、客觀となすのは、畢竟吾人の反省力の結果、一印象を兩極に分ちたるものである。

又主觀といひ、客觀といふものは、本來決して獨立して存在するものでない。是れは印象に就きて然るのみでなく、高尙なる概念に就きても同樣である。凡て主觀客觀の兩界は相對的である。されば主觀なき客觀なく、客觀なき主觀もないのである。

既に動物の精神的現象內には、未だ反省作用なく、從ひて主觀、客觀の區別なき故に從ひて又自覺といふことはないのである。されば氏は

動物が自我を知覺する如く見ゆる場合あるも、決して自我を知覺するのではない、何となれば、動物にありては知覺力、概念力が其心內の現象として起るべき地位までは未だ發達せざるものである。されば自己といふ觀念なきものなれば、如何にして自覺と名づくべきものとしやうや。併し彼等動物も亦其存在すること

を意識し、又其在存することを感ずる。主觀と客觀との兩極に分つは反省の結果である、而して此反省の前にありては主觀たる自我は未だ區別せられないものである。

果して此のく如く動物が意識の各瞬時に其存在を感じながら、猶ほ其經驗の主體としての自我といふ概念を有せずとせば、他の動物をば如何に考て之を認むるか是れ實に適當に起るべき問題である。氏は之に答へて

今吾人をして甲なる小犬が此時代にあるものと假定せしめて、其が如何にして其兄弟なる小犬を考ふるかを檢せしめよ、若し其小犬が推理力を有するものとすれば、彼は次の如く考へて居るのであらう、予れ喜ぶときに我が尾を振る、乙(兄弟の小犬)今其尾を振る、故に彼は喜べるなりと、かく推論して其乙が有情のものであるといふことを認むるであらう、併し彼はかゝる推理力なきを以て、乙が有情のものなることを知らずとすれば、如何にして感ずるか、今假りに甲が或る痛を得たとなし、其痛みの爲めに或る殊特の聲を放ちて呻くと假定せよ、此時に甲は其自ら呻く聲を聞き、其痛感と呻聲とより連合の觀念を作るのである、扨て其後甲が乙の發する同樣の呻聲を聞き茲に嘗て受けたる痛感の記憶を聯想作用によりて喚起するのである、之は唯或る一種の場合を示したるに過ぎないが日常の生活に於て此くの如き聯想作用が幾百回となく起り、遂に其兄弟なる所の小犬を認むる樣になるのである。

次に氏は客體に就きて五つに區別して居る、卽ち

一、感覺經驗の客體、二、知覺としての客體、三、概念としての客體、四、知覺力の客體、五、概念力の客體

又氏は自我と非我とに就きて說明して居る。

非我とは感覺經驗の與件の客觀的方面に關して吾人に敎へたる、凡て其反省力の總合的概念である。自我とは吾人の經驗の主觀的方面に關して吾人に敎へたる凡て其反省力の總合的概念である、此等經驗の全範圍を貫き、客觀的及主觀的兩方面は反省作用によりて區別し得らるべきものなるも、實際の經驗にては分

つべからざるものである。されば自我と非我とは經驗の區別し得へき、而かも分離すべからざる方面より生ずる所の總合したる概念といふを得べきものである。

次に自覺或は自識とは如何なる特殊の意識作用をいふか、之には三つの要素を含んで居るとて、次の如く分つて居る。

一、客觀的概念より區別したる主觀的概念、二、一つの總合的概念に凡ての主觀的經驗の純結果を集中すること、三、總合的、陶汰的なる活動の一制定作用に歸することとして此純結果より更に高き概念。

以上は本意の大要であるが、畢竟するに、主觀、客觀兩界の區別は經驗其物にありては區別すべからざるものであつて、唯々反省作用によりて吾人の思想中に區分せらるゝものとするのである。

第十八章　意識の進化

既に意識作用あり而して氏はペインスペンサーの論を受けて、意識の進化を説くにペインスペンサーの如く、神經作用を意識的現象卽ち精神的作用とは或る一物の兩方面なり、裏表なりと見るのである、而して神經作用其物に於て發達し、意識的作用は意識的作用其物に於て進化したるものとするのである。氏が始めに揭げて居る問題は、意識作用は進化せりといはゞ、果して何物より進化せるかといふのである。氏は之に就き犬が種々の銳敏なる所作をなすことを叙述し、扨て其銳敏なる所作活動は犬の精神によりて起るものにて、犬にも又意識あり、此意識は抑も何物より進化せりとなすか、氏は先づ客觀的方面よりは寧ろ生理學的方面より解釋して曰く精神的作用は神經組織分子間に存する特殊の震動若しくは攪亂である。卽ち是れエテルヂーの一種の變體である、而して犬がよりて以て發達せる根原なる所の精虫内には犬の種族が發達せりといふアミーバ樣の祖先にても既に發達したる犬が有する如き復雜にして而かも整然たる分子の震動に類する如きものは決してないのであらう、さる復雜規矩ある分子震動は存せずとするも、然かも

其精虫内には後に發達して此神經内の復雜にして而かも規矩ある分子震動となるべき根原の單純なる有機的運動は是非なくてはならぬのである。言ひ換ゆれば犬の腦髓に特殊の活動をなさしむる或るエネルギーの甚だ復雜なるものゝ發達するに至りたのは、單純なる有機的物體即ち犬の精虫内は存する所の單純なる勢力の一樣式より發達せるものでなければならぬ。精虫より胎兒となり胎兒より更に小犬となり、小犬更に進化し、發達して犬となる。此間に吾人は一歩一歩其肉體的構造の進北發達の階段を知ることが出來る。而して此一々の階段は皆な各々其時其時の有機的エネルギーの發展でなければならぬ。

而して此特殊のエネルギーの活動する間は即ち生活して居るのであつて、之が生命である。生命は急流内にある渦の如きものである。其繼續的存在をなすのは外界のエネルギーに憑依する。而して其死滅するとき即ち生命を失ふときは、再び外圍のエネルギーに還歸するのである。

以上は氏が所謂客觀的或は物質的説明である。氏は更に又主觀的方面より意識の進化を論じ主觀的或は精神的には犬の精神は何物より發達せるかといふことに就きて論じて居る。即ち犬が發達せる精虫内には意識的狀態と名くる如き左樣に復雜なる作用は決してないであろう。然らば犬の意識的狀態は何より進化し來りたるか。曰く犬の有する意識よりも更に單純なる狀態より進化したのである。即ち精虫の有する單純なるエネルギーに主觀的に對應する程の極めて單純なる精神狀態なけらぬばならぬ。

之を要するに氏の説は犬の腦髓中にある復雜なる分子間の震動が精虫の單純なる震動によりて發達進化せる如く、復雜なる意識狀態は閾下意識とも稱ずべき單純なる狀態より進化發達せるものとするのである。是れ即ち氏がペイン、スペンサーと等しく平行論なる所以である。

氏は又通常進化論者即ち生物學者等が唱ふる如き進化論に反對して、通常進化論者は有機体は無機体より進化せりとなすも、吾人は之に反して如何なるエネルギーにても即ち有機と無機体とを問はず、共に皆な意識的或は閾下意識的方面を有す

るものとするのであつて、意識的狀態は閾下意識狀態より發達進化し、其閾下意識的狀態は更らに單純なる閾下意識的狀態より來りたるものであると論じて居る。是れ實に氏が奉する平行論より演繹したるものである。果して無機體にもさる狀態如何に單純なりとも意識的狀態の如きもの存在せりとなすは、一家の假定としか見ることの出來ないものである。是れ蓋し無機體より有機體が生せりと主張する議論にあつては、無より有を生ずるといふ非難がある。故に其非難を避けんとて案出せる臆說であるけれども、此論も畢竟するに、一の假定に入らなければならぬ。然かも事實と反する如き假定を作らねばならぬのであつて、無機體より有機體を生せりと主張する論と五十步百步の差である。

何人も吾人々類にありては、意識の存在は疑はざる所である。然らは如何にして生じたるかといふ問に對して、三個の答を得る。卽ち一は人類に限りて創造せられたものである、若くは人類の進化したる祖先の下等動物中に造られたものであると、する說、第二に直ちにエネルギーより進化したりとする說、第三に閾下意識單純なる狀態より進化し來りたるものとする說とである。而して此三者の答に就きて氏は曰く、第一の說は論理的には維持し得へき論であつて、予が同情を表するものである。第二の說は吾人と全く反對の位置にあるものである。第三は卽ち吾人の前に論じたる自說である、されは第一、第三の二つの中何れか一者を採らなければならぬ、是れ吾人が次章に於て論せんとする所であるといふので、本章の結論である。

第十九章　進化に於ける陶汰的總合

本章は先づ始めに無機物の變化、例へば或る礦物を水中に入れて溶解せしめたるものが、水の溫度の如何によりて水中に其礦物の結晶體が或は生し、或は滅すること、又化學作用が或る事情の下に或は生と、或は生せざることを記載し、其結晶し、或は化合するは、礦物或は元素其物の內部の法則、換言すれば其物の固有の性質であつて、さて此等の物をして左樣の變化をなさしむる所のものを溫度等外圍の事情の如何によることを論じて居る、蓋しかゝる論は心理學には更に關係なき如きも

氏は之を以て比論として心意の現象を説明せんとするのである。勿論氏は本章の始めに公言せる如く、決して無機物の變化する狀態と有機物又は精神的現象の進化する狀態とが全く同一法則にて支配し得るものとせるのではない。併し無機物が變化する狀態と有機物若しくは心理的現象の進化する活動とに於ては、甚だよく相類して居る。否な、或る度に於ては同し法則が行はれて居る。卽ち一は無機物若しくは有機物其物の內部の法則によりて變化し、或は進化し、之と同時に又外圍の事情の如何によりて或は變化し、變化せざるが如く進化に於ても至大の影響を蒙ることを説明せんとするのである。

次に經驗派と統覺派との批評に移つて、經驗派の學者が出來得る限り心理學を客觀的科學として研究せんと勉め、又其一般には生物學、格段には神經生理學の結果を採用するのは、其正しき所であるが、餘り極端に走り、外圍の事情卽ち外部の法則をのみ重く視るのは、其缺點であるといひ、又後者卽ち統覺派にありては、心理學に於て陶汰的總合の必要を説き、意識的主觀の活動を研究するは宜きも、是れ亦他の極端に走りて、更に外圍の事情如何を顧みない點は其缺點であることを述べて、著者自身の意見としては、兩者を調和し、兩者の説の長を採りて、一方には陶汰的總合卽ち精神內部の活動を認め、他方には外圍の事情も亦大に進化に必要なる要素であつて、兩者一方を捨つべきものでない、何れも重要なる要素であることを論じて居る。

氏は更に歩を進めて、有機物の起原は果して無機物にあるかの問を提起し、

今日實驗室に於て原形質を人爲的に試驗內に製作することは出來ぬ、從ひて無機物より有機物が進化し來りたものであるといふ證明は與ふることは出來ない。併し予一個人としては此事あり得べきことである、單に吾人が未だ之を製作する方法を知らぬのであるだらう、

といふて居る。然れども之れは氏が自狀せるが如く、全く一の信仰に過ぎないのである。科學上の解釋としては何等の價値を有せざる言である。否な理論上には無より有を生ずるといふことは出來ないといふ反證が却て有力である。

氏が本章に於て無機物の變化の有樣等を説明した所以は、比論を以て有機體の進化に於ける活動を説き、更に進んで精神的現象の解釋をなさんと企てたのである。次に氏は生物進化の事を説き、又最も委細に獲得したる性質の事を論じて、有名なるワイズマン氏の説を引用して、其性質の遺傳は生物には拒否すべきものであることを述べ、終りに精神的現象に就きて六つの問題を提起して、之に對して一々解答を付して居る。即ち其第一問は精神的發達に於ても亦陶汰的總合があるか(生物に於けるか如く)といふのであつて、其答は然り之れありといふことである。之は今日何人も疑はざることである。第二問に於ては、精神の進化に對する外圍事情の性質は如何といふに答へて、無機體、有機體共に外圍の事情の如何によりて變化するものであるが如く、精神の發達も亦外圍事情に關するものである。故に各個人は精神的組織は能く社會的其他の外圍の事情と調和して、競爭又は敵手の爲めに排除せられない樣にせざるべからざるを論じ、次に第三問に移りて、變化するに定りあるか又不定なるかに答ふるに、結晶體が其內部に有ずる所の結晶の法則によりて支配せらるゝ如く、精神の變化にも定まりあるものである。陶汰的棕合は定りたる結果を生ず、即ち精神的進化は精神其物の內部の法則に從ひて制限せらるゝことを論じ、精神の發達には次第をなさゝるもの、即ち突然生ずるものあるかといふ第四問に對しては、連續的次第を劃然分つものあり、即ち例へば感覺經驗及び智能的活動は徐々と進化して、曲線を以て顯はすときは、次第に上騰せる一線をなすものと見るを得べきも、一たび關係といふことを知覺するときには、心理的現象に於て一新變化をなすものであると答へ、第五問に於て精神の發達は自然的陶汰に全く支配せらるゝものなるか否かといふに對し、否といふ語を以て答へ、終りに獲得したる性質の遺傳するとなす説は心理的現象を説明する上に必要なるかと提起して、氏は生物學にて有名なるワイズマン氏の説を採用して、獲得したる性質が遺傳する證明を科學的に見出すことと出來ず、又其遺傳するといふ説を採用する必要なきを以て答へて居る。

第二十章　人類及び高等動物の比較心理學

本章は重に情緒に關する比較研究である。蓋し是迄章を重ねて論じた事は主として意識的現象の他の方面であつて、情緒に就きては論じて居ることばない。唯第十一章に於て管理力が快不快によりて決せらるゝことをいふたのみである。故に概括して本章に於て情緒の一般を論ずるのが著者の意のある所である樣に思はれる。而して氏は情緒は意識の如何なる狀態にあるものとなすかといふに、燒點的狀態にあるものでなく、傍邊的狀態にあるものとして居る。卽ち精神の背面に存する作用とするのである。從ひて情緒を適當に分析し、又分類するは至難の業として居る。本章に公言せるが如く、氏は情緒に就きては深く論究して居らぬ。氏のいふて居るには、

比較心理學にありては、予は人類及び動物に共通なる感覺經驗の範圍を通じて動物の情的狀態は吾人々類と同樣であることを正當に假定し得べきものと考

ふ云云と。

固情に就きては全く感覺經驗より生じたものであつて、反省的又は自覺的階段を經て始めて生ずるものでない。併し勿論高尙なる同情にありては、人類が特に社會的生活をなすにより、高尙なる知的作用等によりて派生したものであつて、動物の有して居らぬ所であるけれど、同情の根本的狀態は人類動物共通であると論じて居る。

美といふ感は動物も之を有して居ることは、生物學者の唱ふる事實であつて、何人も疑はない所である。然れども動物の感ずる美は完く感覺經驗より來る所であつて、彼の關係の知覺を得、之を混合し成れる所謂美的觀念の如きは彼等動物の有せざる所として居る。生物學上が雄を撰ぶに、或は其音の美なるを以てしたり、或は身體の毛色の美を以てしたり、或は其風采の善きを以てすること、卽ち所謂姓的撰擇なる事實を說明する上に於て、或る生物學者は動物が能く其理想的模型を心中に描き之を標準として之に近きものを撰ふのであるといひ、又二つの雄の長短を比

較し、美醜を比較して、其意に合ひたるものを撰ぶのであると論じ從ひて彼等動物にも關係知覺力を許す論者もあれど、之れは氏が採らざる所である。又假令姓的撰擇の説は生物學上確實なる事實なりとするも、之か爲めに敢て故らに關係知覺力を彼等か有して居るとする必要はない。感覺經驗の結果であるといふことを以て此事實も説明し得ないことはないといふのは氏の持論である。

又動物か理想を描き、或は標準を有して居るなどいふことは、氏は全く拒否するのである。

人類は眞理の標準を有し、又正義の標準を有して居る。併し動物にては是等の精神作用あることなし。或は動物か能く『云々すべきものなり』といふことを感知する如く論する學者もあれど、決して然らず。彼等にも下等の衝動と高等なる衝動とあつて、後者を採りて前者を棄つることはあり、然れども人類の有する如き道德觀念は決して有して居るものでない。

之を要するに、氏の説によれは動物には感覺經驗及び之によりて生せる結果たる心理的作用はあれど、夫れ以上には未た進化して居らぬものとなし、如何なる精神的現象も凡て動物の精神的現象は感覺經驗を基礎として論するのである。

五　結論

以上解説し來つた處でモルガン氏の『比較心理學序論』の大體の主旨は略々之を了解することが出來たであらうと信ずる。緒言に於ても言へる如く、此解説書に於ては各部分々々を解説する序でに大體の批評を加へて來たが、今はそれに言ひ殘した氣付きの點を二三個條述べて置くのも、あながち無益ではなからうと思ふ。

一　本書の研究の目的に關すること　ウント氏は其著『人間及び動物の心理學』に於て、動物心理學の研究に關して二つの着眼點がある、一は一般に有機界に於ける心理的生活の發達を歴史的に研究するもの、他は人間心理學の考究に資する目的を以て動物の心理を研究するもの、是等二種の目的があるとして、氏は自己の研究を第二の比較的に範圍の狹い研究目的に制限して居る。而してモルガン氏のは

如何といふに、氏の研究目的も亦ヴント氏と一致して居るのである。別に心的生活を歴史的に研究するのを目的としたのではない。前に言ふ第一義に於ける研究は動物心理學其ものとしては頗る重要なる價値を有するものに相違ないけれども、之によりて人間に於ける意識の進化に光明を與ふるといふことには却て資する所がないのである。今日では第二義に於ける比較心理學が正當にして適切なるものであることは稍や認められて居るやうだが、モルガン氏も此意義に於ける比較心理學を採られたのは多とすべきである。

二　本書の敍述の精粗に關することゞ　ヴント氏の著書では動物心理學を說くに必要なる準備として普通の心理的敍述をなすこと至つて精しく、從ひて動物心理學の敍述が前後相照應して却て領會し易い點が多い。モルガン氏も普通の心理的事實を說明して、而る後に動物の心理に說き及ぼして居るが、其精密なる點に於ては缺けて居るやうである。是は尙ほ可なりとして、氏の記述に於ては情的生活及び意的生活に關する觀察を缺き、又動物の社會的本能、動物と人間との間の關係など

に就きて說明して居らない。勿論氏は本書に題して『比較心理學序論』として居るから已むを得んとは言へるものの、多少の敍述は之を記載しても宜かつたいらう又記載すべきであつたいらうと思ふ。兎に角吾人は本書の敍述の精粗に關して不滿足の點があるとするのである。

三　本書の內容の說明に關すること　モルガン氏はジェムソン氏も言へるが如く、術語の用ひ方には餘程注意深きが故に、氏の說明する所は吾人之を正確に領會することが出來る。而して自から其論法の首尾一貫せるものあるは頗る喜ぶべき所である。勿論比較心理學に關する研究は尙ほ幼稚であるを免れないから、種々の點に於て不確實なることあり、多くの點に於て氏の說明を首肯することが出來ないこともあるが、兎に角此種の著書の至つて尠ない時に、此くの如く通俗的で而かも說明の稍や備はれる著書が學界に貢獻されたのは、大に賀すべきである。吾人は氏の著書『動物の生活及び智慧』の出版によりて、氏が比較心理學の更に精緻なる研究に從事しつゝあるを知る。氏尙ほ少壯、前途有望の學者たり、吾人は氏が必ず大に

奮勵して斯學の研究に成功するの日あるべきを信ずるものである。

（完）

モルガン氏比較心理學序論解說終

明治三十三年七月二十日印刷
明治三十三年七月廿三日分冊第三發行

心理學書解說
全部定價金四圓六拾錢
分冊第三實價金四拾錢

編輯兼發行者　育成會　東京市本郷區森川町一番地
代表者　右主幹　石川榮司　東京市本郷區森川町一番地
印刷者　長谷川辰二郎　東京市神田區錦町三丁目一番地
印刷所　同志社活版所　東京市神田區錦町三丁目一番地

不許複製
育成會

87
10

012748-000-2

87-10

モルガン比較心理学序論

杉山　富槌／著

M33

AAI-0330